

西有家町文化財調査報告書第1集

# 風呂川遺跡

1982

長崎県西有家町教育委員会



## ご あ い さ つ

西有家町は長崎県の南部、島原半島の東南にあり、朝には秀峰雲仙を仰ぎ、夕には有明海のかなたに夕日が沈む景勝の地であります。年間を通して気候温暖、おおらかな自然に恵まれて、人々の心もまた豊かで勤勉な土地柄であります。朝夕に人の往来する須川港と、全国的に著名な製麺業の活況は、豊かな自然と人の心のあらわれと申せましょう。

このたび、当町風呂川地区の土地区画整理事業にさきだち、地下に包蔵されている埋蔵文化財の緊急発掘調査を実施し、調査結果について報告書を公刊する運びになりましたが、遠い縄文時代の人々のくらしのあとであることが判明いたしております。「温故知新」という言葉がありますが、今までのこととよく知らないければ将来の指針を得ることができない、そのような意味の言葉であります。風呂川の岡で嘗々として営みを続けた縄文時代の人々の姿を思いうかべるとき、ともすれば目前のことと目にうばわれがちな現代人にとって、なにが必要であるかを感じるのであります。

将来を予見するよですがともなる文化財は一度損わると、もとの姿にかえすことができません。今後とも私たちが文化財を大切に扱っていくことは、とりもなおさず人の心と生活を大事にする心に通ずるものと確信するものであります。本書がこのような点を考えるよがとなりますことを、また学術研究の資料となり得ますことを念じるものであります。

最後になりましたが、風呂川遺跡調査の立案から調査の実施にいたるまで、御多忙中終始指導を賜った県文化課の方々に、敬意と謝意を表してごあいさつといたします。

昭和57年3月

西有家町長 長橋敬喜



## 発刊にあたって

このたび、当町にあります風呂川遺跡に関する調査報告書を刊行することになりました。調査の契機になりましたのは、風呂川地区の土地区画整理事業区内に本遺跡が包蔵されていたことであります。地下に包蔵されている埋蔵文化財は、いわば遠い祖先が残してくれた遺産でありますから、可能な限り保存して次の世代に伝えることが現代に生きる私どもの責務なのであります。道路や工場用地などの開発も人間の生活にとって欠かせないことがあります。

開発事業と文化財、私どもの日常生活で当面することの多い事象であります。文化財の保存が困難な場合、文化財の状態をくわしく記録して将来に残す必要が生じるわけあります。

風呂川遺跡の調査を実施いたした理由もこの点にあります。昭和56年度において試掘調査および本調査を実施したのであります。調査を担当頼った県文化課によると、縄文時代の人々の暮らしのあとが認められました由で、西有家町の遠い昔の姿が確認されたわけであります。遺跡からは縄文式土器や石器、弥生時代の土器のほか、中国の元や明の時代の遺物も発見されており、西有家の地が、九州各地のみならず遠く古く中国とのかかわりもあったことを知るのであります。

私たち現代に生きるものが、これらの遺物に接しますとき、単に古いもの、珍しいものとしてではなく、嘗々として生きた遠い祖先の生きざまを知るのであります。

本書を公刊するにあたり、私どもがなにを考え、どのように生きるかを考えるよがとなれば、と願うものであります。おわりに、調査の実施から原稿の執筆まで終始御努力頑った県文化課の方々に深く感謝申しあげる次第であります。

昭和57年3月

西有家町教育長 松永好之

## 調査関係者

### 西有家町教育委員会

松永好之（教育長）

伯川利幸（社会教育主事）

### 西有家町役場 建設課

木村孔宏（建設課長）

伊藤孝昭（都市計画係長）

相川寿勝（都市計画係）

伊崎公則（〃）

### 長崎県文化課

正林護（文化課指導主事）

安楽勉（文化財保護主事）

藤田和裕（〃）

### 調査協力者

田中都夫・植木福松・植木キヨ子・植木正男・渡辺スエ子・植木エキ子・菅原チサ・藤田シズエ・伊藤トモエ・入江繁光・植木増穂・植木マミ・宮岡ヨリコ・小田タカ・渡辺フジカ・志岐千歳・鬼山キヨ・川崎敏子・川崎トミヨ・志岐邦寿・志岐由美子・近藤マツエ・瀬川トミ子・伊崎ナツ子・鳥田トシエ・城川ツヤ子・藤木チヨ子・金子嘉満太・林スエ子・溝田トミエ・岩原治夫・木多チエ子・石橋文代・金子木子・中村治・松尾フミエ・寺田正男・高木フジカ・瀬川義夫・中村テル子・石橋稻子・林サトシ・藤原ミツヨ・馬場セツ子・植木末松・安達タマ子

### 調査内業

細田純代・吉田英子・村田幸子・山口文子・尾口瑞恵

上記のほか、下原の藤田さん、須川の伊崎珠一さんには、器材・遺物の保管その他のお世話をうけた。記して謝意を表したい。

## 例　　言

- 1 本書は、風呂川地区土地区画整理事業に伴う、長崎県南高来郡西有家町所在の風呂川遺跡緊急発掘調査の報告書である。
- 2 調査を実施した遺跡は二箇所であるが、同一計画区域内にあるため、第1地点・第2地点に分け、この総称として風呂川遺跡と呼ぶことにした。
- 3 調査は、西有家町・西有家町教育委員会を主体とし、長崎県文化課がこれに協力して実施した。
- 4 本書の執筆は分担して行い、出土遺物の土器の項を安楽が、円盤状陶磁製品の項を宮崎貴夫が担当し、その他は藤田が担当した。
- 5 調査時の写真撮影は安楽・藤田が行い、報告書中の遺物撮影は藤田が行った。
- 6 本遺跡からの出土遺物と、本遺跡に関する図面および写真類の全ては、長崎県文化課が保管の任にあたっている。
- 7 本書の編集は藤田による。

## 本文目次

1 調査に至る経緯	1
2 風呂川遺跡の立地と面積	2
3 調査	
(1) 第1次調査の概要	6
(2) 第2次調査の概要	9
4 遺物	
(1) 第1地点出土の遺物	16
土器	16
石器	21
(2) 第2地点出土の遺物	26
土器	26
石器	28
青磁・磁器・瓦器	33
(3) 円筒状陶磁製品	36
5 遺構	
(1) 集石遺構	47
(2) 不明堅穴遺構	48
(3) 配石遺構	50
6 おわりに	52

## 挿 図 目 次

第1図	風呂川遺跡位置図	2
第2図	風呂川遺跡周辺の地形と遺跡分布図	3
第3図	風呂川遺跡地形および第1次調査区域図	5
第4図	第1次調査 試掘 sondage(1)	7
第5図	第1次調査 試掘 sondage(2)	8
第6図	第2次調査 第1地点調査区域図	9
第7図	第2次調査 第1地点土層図	10
第8図	第2次調査 第2地点調査区域図	12
第9図	第2次調査 第2地点土層図(1)	13
第10図	第2次調査 第2地点土層図(2)	15
第11図	第1地点出土土器実測図(1)	17
第12図	第1地点出土土器実測図(2)	19
第13図	第1地点出土石器実測図(1)	22
第14図	第1地点出土石器実測図(2)	23
第15図	第1地点出土石器実測図(3)	25
第16図	第2地点出土土器実測図(1)	26
第17図	第2地点出土土器実測図(2)	27
第18図	第2地点出土石器実測図(1)	29
第19図	第2地点出土石器実測図(2)	30
第20図	第2地点出土石器実測図(3)	32
第21図	第2地点出土土器その他の土器	34
第22図	円盤状陶磁製品実測図	37
第23図	周縁の調整加工・折断面	38
第24図	円盤状陶磁製品出土分布図	40
第25図	長径と短径の関係図	42
第26図	直徑と厚さの関係図	42
第27図	直徑と重量・厚さの関係図	42
第28図	遊び具の系統図(関連するもの)	44
第29図	1号集石・2号集石遺構実測図	47
第30図	不明窪穴遺構実測図	49
第31図	配石遺構実測図	50

## 図版目次

図版1	風呂川遺跡遠景	57
図版2	第1次調査 調査風景	58
図版3	風呂川遺跡遠景(第1地点)	59
図版4	第1次調査 A—3グリッド	60
図版5	第1次調査 土層(1)	61
図版6	第1次調査 土層(2)	62
図版7	第1地点 調査風景	63
図版8	第1地点 土層(1)	64
図版9	第1地点 土層(2)	65
図版10	第1地点 遺物出土状況(1) 土器	66
図版11	第1地点 遺物出土状況(2) 石器	67
図版12	第1地点 遺物出土状況(3) 石器	68
図版13	第1地点出土土器(1)	69
図版14	第1地点出土土器(2)	70
図版15	第1地点出土石器(1)	71
図版16	第1地点出土石器(2)	72
図版17	第1地点出土石器(3)	73
図版18	第1地点出土石器(4) 石斧	74
図版19	風呂川遺跡遠景(第2地点)	75
図版20	第2地点 調査風景	76
図版21	第2地点 調査風景	77
図版22	第2地点 土層(1)	78
図版23	第2地点 土層(2)	79
図版24	第2地点 土層(3)	80
図版25	第2地点出土土器	81
図版26	第2地点出土石器(1)	82
図版27	第2地点出土石器(2)	83
図版28	第2地点出土石器(3)	84
図版29	第2地点出土石器(4)	85
図版30	第2地点出土石器(5)	86
図版31	第2地点出土青磁・磁器・瓦器	87
図版32	円盤状陶磁製品(1)	88

図版33 円盤状陶磁製品(2).....	89
図版34 円盤状陶磁製品(3).....	90
図版35 第2地点 墓石遺構(1).....	91
図版36 第2地点 墓石遺構(2) 1号墓石.....	92
図版37 第2地点 墓石遺構(3) 2号墓石.....	93
図版38 第2地点 不明堅穴(1).....	94
図版39 第2地点 不明堅穴(2).....	95
図版40 第2地点 配石遺構.....	96
図版41 見学会風景.....	97

## 表 目 次

第1表 円盤状陶磁製品一覧表.....	38
第2表 使用痕観察表.....	41

## 1. 調査に至る経緯

風呂川地区土地区画整理事業は、西有家町によって計画され、昭和55年から同58年までに実施されることとなった。この事業は、「西有家町の販売市街地における土地利用の転換を、主要施設等の移転により図り、河川改修事業等と併せて浮来の町の中心として町役場等、主要公益施設を核とする環境良好な南向き斜面住宅地として整備する」とことを目的とし、当該地に伸びる舌状台地二箇所の端部を切り落として、その間の水口・畠地を作宅地とすることとなった。

昭和55年1月17日、南高来郡北有馬町今福遺跡の発掘調査に従事していた県文化課官筒貴夫文化財保護主事が現地を踏査した結果、「散発的に遺物（土器・石器類）が見られる」、「試掘を実施する必要があると思われる」との報告が県文化課になされ、町にもこの旨の連絡が斯くよりなされ、さらに、同2月4日付けで西有家町長により「土木工事等による埋蔵文化財発掘に関する届出書」が提出された。この後、町から「埋蔵文化財の取扱について」協議の申し込みがなされ、県文化課は、1.同事業計画予定地18.1ヘクタールのうち、約1.2ヘクタールについては、試掘調査を実施し、遺跡包蔵状態の存否、および包蔵範囲確認を実施される必要がある。2.前項の調査によって、遺跡の包蔵が認められた場合は、包蔵範囲について緊急発掘調査を実施して記録保存を行う必要がある。3.以上の調査に際する取扱いについては、文化財保護法第98条2の規定により取扱われたい。との回答をした。

前述の協議にもとづき、西有家町が主体となって昭和56年5月11日から同6月13日までの予定で、調査対象面積の約3%にあたる360m<sup>2</sup>の試掘を目的とした第1次調査を行うこととし、県文化課指導主事正林謙・同文化財保護主事安楽勉・藤田和裕が調査を担当した。この調査は作業員の不足等によって若干遅れが生じ、6月19日まで行い、その結果、調査対象地域内に二箇所の遺物包蔵地等を検出した。このため、この部分の本調査を実施することとなったが、他の現場の調査との関係ですぐにはかかれず、昭和56年9月21日から行うこととした。

第2次調査は、9月21日から11月14日まで、約600m<sup>2</sup>を対象とし、安楽勉・藤田和裕が担当することとなった。この回の調査は、作業員の確保等、町側の全面的な協力によって順調に進み、予定通り11月14日、予定以上の面積の調査を終了することができた。

## 2. 風呂川遺跡の立地と環境

風呂川流域は、長崎県の南辺を占める島原半島の南東部に位置し（第1図）、行政上は、南島原郡西有家町須川1780-1番地、同五区田1688番地にある。

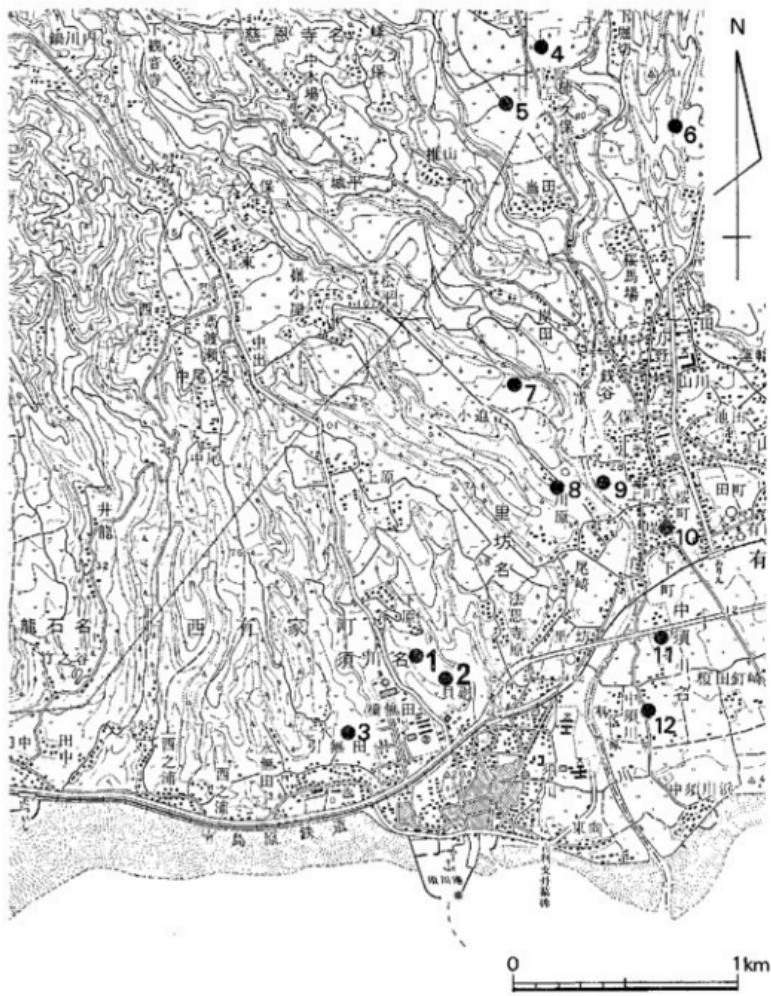
島原半島は、雲仙火山群と、南部の第三紀層をおおう溶岩台地群とによって形成され、その北西部の狹隘な愛野地峡で肥前半島と陸続きとなっている半島である。北・東側を有明海、南側を大草灘、西側を千々石湾（橋湾）によって囲まれる、東西約25km、南北約33kmほどの大きさの半島である。半島のはば中央部に雲仙岳と謳称される、標高1359.7mの普賢岳を主峰として、妙見岳、国見岳、野岳などの火山群がそびえ、その周辺にも網笠山、眉山、九千部岳など多くの山岳がめぐっている。半島の北側から東側にかけては、雲仙岳の裾野が緩い傾斜で放射状に広がり、その先端は有明海に達し、海岸線は比較的単調な砂質海岸を構成している。この、緩い傾斜の台地には若い峡谷が刻まれ、これらによって形成された小扇状地は水田として利用され、海岸冲積地、干拓地の水田とともに半島内での多水田地帯となっている。これに較べ、半島の西側の景観はかなり異なり、網笠山・九千部岳によってできたといわれる溶岩が海岸まで迫り、急な崖になって千々石方に落ち込み、岩石の多い海岸線を形作っている。

遺跡のある西有家町は、雲仙岳から南東・南に向いて伸びる多数の丘陵と、その間に開削した小河川によって形成された小平野とでなっており、町の東側を南流する有家川によって形成された平野が最大の平地となっている。

遺跡は、雲仙岳から南に向いて伸びた丘陵上の、標高30～40mの間に位置し、東から南にかけては有明海をへだてて熊本県宇土半島から大草諸島を一望のもとに望み得る。南西方向は、海上5kmを隔てて、島原の島の舞台となつた原城が見える。



第1図 風呂川流域位置図



第2図　風呂川遺跡周辺の地形と遺跡分布図

- |                |                |           |
|----------------|----------------|-----------|
| 1. 風呂川遺跡（第1地点） | 2. 風呂川遺跡（第2地点） | 3. 引無田遺跡  |
| 4. 姉の久保遺跡      | 5. 桂山遺跡        | 6. 尾上遺跡   |
| 7. 当田遺跡        | 8. 尾崎貝塚        | 9. 尾崎遺跡   |
| 10. 堀遺跡        | 11. 沙塚古墳       | 12. 中須川遺跡 |

風呂川遺跡周辺の遺跡について概観すると、現在までの時点では、西有家町内での遺跡の存在はあまり知られていない。さらに同町内においても、遺跡の分布は東側に多い傾向があり、ほとんどが有家川の西岸、雲仙岳から伸びた丘陵端部に立地している。

第2圖は、全国遺跡地図によるが、1・2が風呂川遺跡で、その南西に3の引無川遺跡がある。散布地である。4は柿の久保遺跡で、散布地と墳墓となっている。5は椎山遺跡。6は尾上遺跡。7は当田遺跡で5～7とも散布地である。8は尾崎貝塚で弥生時代中期から後期にかけてのものといわれている。9は尾崎塗跡で散布地。10は堤遺跡で、散布地である。11は沙塚古墳。<sup>(註2)</sup> 12は中須川遺跡で散布地である。

(註3)

これらの遺跡のほか、風呂川遺跡から東北東4km強の場所に堂崎遺跡がある。ここは绳文晚期を主体とする遺跡である。また西方5kmには、弥生時代中期後半から後期と、中世（鎌倉時代）<sup>(註4)</sup>とを主体とする今福遺跡がある。さらに、西北西8.5kmには、国指定史跡の原山支石墓群<sup>(註5)</sup>がある。

風呂川遺跡の現状は、ほとんどが畑地であり、ジャガイモ、さつまいもの植えられた畑もあり、みかん畑となっているところもある。区画整理事業が始まるために手が入れられずに荒れたままの畑が多かったが、かつては一面の畑地として利用されていたものと思われる。

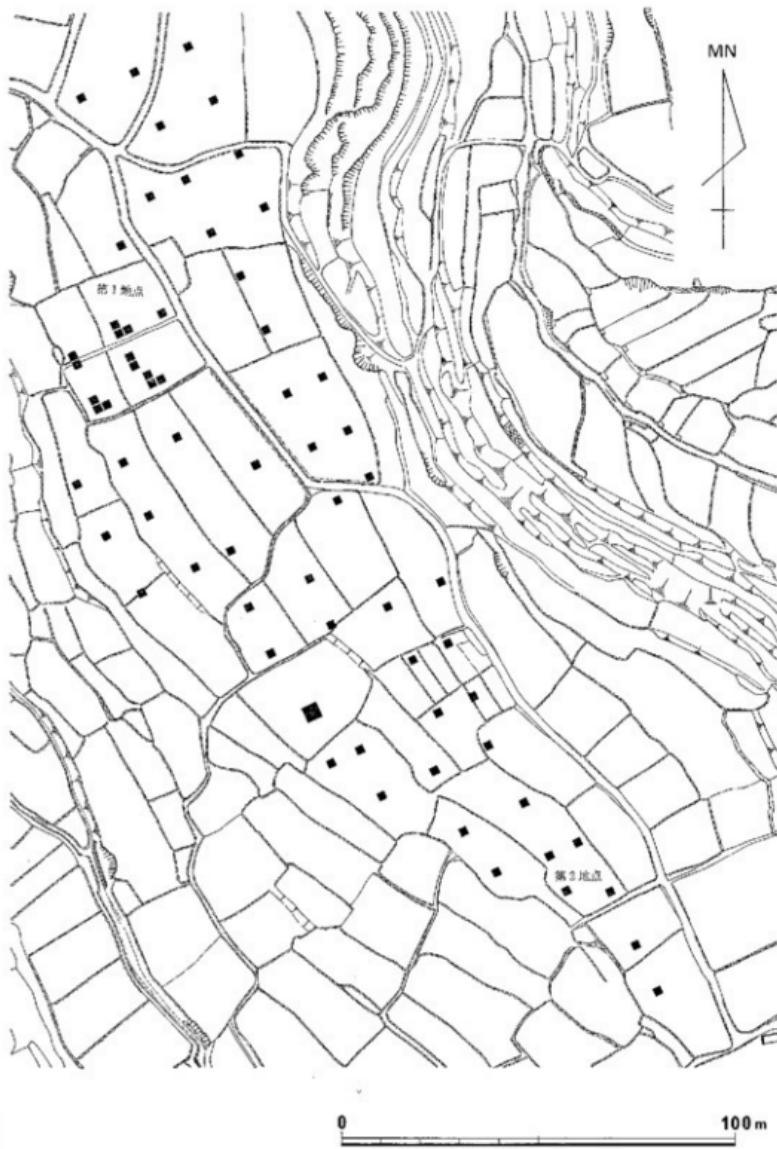
註1 石井泰義「島原半島における火山海岸の景域区分」日本地誌ゼミナール VII 1975

2 金剛遺跡地図 42 長崎県 1976 では、この地点が10の遺跡となっているが間違いであろう。なおこの近辺の遺跡については、「有家町内における文化財の分布調査」有家町教育委員会 1980 に詳しい。

3 有家町堂崎海岸にある。1980, 1981 長崎県文化課で調査。報告書近刊。

4 北有馬町今福にある。1978～1981 長崎県文化課で調査。1983～1985 報告書刊行の予定。

5 「国指定史跡原山支石墓群 碑塚整備事業報告書」北有馬町教育委員会 1981



第3図　黒部川遺跡地形および第1次調査区域図

### 3. 調査

#### (1) 第1次調査の概要

第1次調査は、昭和56年5月11日から同6月19日まで、先に実施された分布調査の際、黒曜石片や土器片などの散布が認められた、舌状をした丘陵尾根上の緩やかな傾斜地、約1.2ヘクタールを対象として行った。

調査方法は、原則として調査対象地域内を $15m \times 15m$ の大きさの正方形に区切り、それぞれの交点に $2m \times 2m$ の試掘場を設定した。しかし、地形上の制約から必ずしもこの通りでない所も多い。また、周囲の状況などから、遺構・遺物包含層の予察がまず無理と思われる地点での試掘はしなかった。それぞれの試掘場の名称には、東から西へA・B・C……、南から北に0・1・2……とし、交わった両方の記号を付して呼ぶことにした(第3図)。

調査の結果、調査対象地域内に二箇所の、遺構および遺物包蔵地のあることを確認した。丘陵の西側斜面、標高37mほどを中心として位置するものと、丘陵南側の端部に近い標高32m付近を中心とするものの二箇所である。

西側斜面のものは、F・G列の13・14に囲まれたように存在しており、縄文時代晩期の遺物が認められた。また、柱穴と思われるものも検出したが、時期的に古くなるものではなさそうであった。このほかに遺構は認められなかったが、土壟状のくぼみを検出した。

丘陵南端部のA～C列と0～4列間の試掘場からは、縄文時代早期と考えられる土器片が出土した。A-2グリッドでは岩盤を掘り込み、その底部に大小の礫を入れた状況の遺構が検出されたが、この回の調査では時期、性格等についての資料は得ることができなかった。A-3グリッドにおいても、土器片・凹石などを含む土壤様の掘り込みを検出したが、その一部分のみが試掘場にかかっていたので、全体の調査については次回の調査を待つこととして埋め戻した。F-7グリッドにおいても、縄文時代の土器片をわずかに認めたため、拡張して調査したが、遺物の量は希薄で、文化層としてとらえ難く、調査は打切った。

調査区域の北部、C・D列の10～13の間では、表土の耕作土のすぐ下から風化礫を含む赤褐色の層が現れ、遺物は全く出土せず、遺構も認められなかった。

調査区域北端部にあたる、丘陵尾根の頂部とその西側斜面の、現在ジャガイモ畑として使用されていたB列からE列の14～18列間は、今回調査地域の最高所で、標高40mをこえる場所であるが、ここは地山まで浅く、地表下20cm内外で安山岩風化礫の岩盤がみられ、遺構・遺物包含層は全く認められなかった。

丘陵西側斜面に設けたG・H列で、10～12列間の各試掘場の状況を見ると、地山までの深さは地表下0.5～1mにおよび、わずかではあるが土器片や黒曜石片が認められた。しかし、確実な遺物を含んだ文化層としての遺物包含層は認め難く、畠地として開墾する際、あるいは小

きな畝を統合する時に削平され、擾乱されたものと判断された。

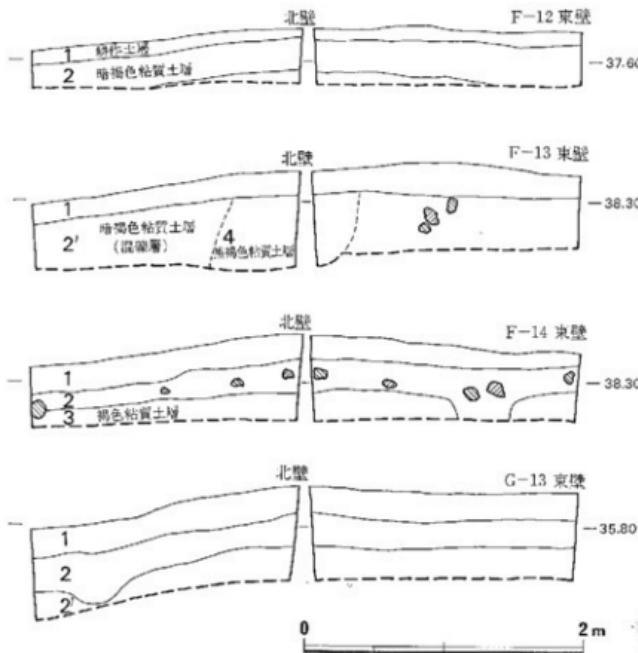
さらに、第3図には入りきれなかったが、南西側の標高13~16mのゆるい斜面にI列を三箇所設定した。ここは耕作土の下が暗褐色粘質土層で、第3層が褐色粘質土層あるいはこれに小礫の混じった層となっている。この場所からの遺物は、耕作土と第2層中からわずかに出土したにとどまり、遺物包含層としてはとらえられなかった。

以上の調査の結果から、先述した二箇所の、木調査を実施する必要のある区域を決定した。

#### 土層（第4・5図、図版5・6）

第1次調査では、二箇所の遺構・遺物を検出できる地区を確認したが、ここではこの二箇所についての土層について、後でもふれるため、簡単に記す。

まず、北側のもの、これを第1地点と今後呼び、丘陵南端のものを第2地点と呼ぶが、第1地点では、最も遺物が多量に出土したF-13グリッド周辺の土層を図示する（第4図）。ここでは、基本的には表土層の耕作土層、第2層が暗褐色粘質土層で、部分的に2'層とした疊を混じる部分もある。第3層が褐色粘質土層となっている。F-13グリッドで認められた落ち込

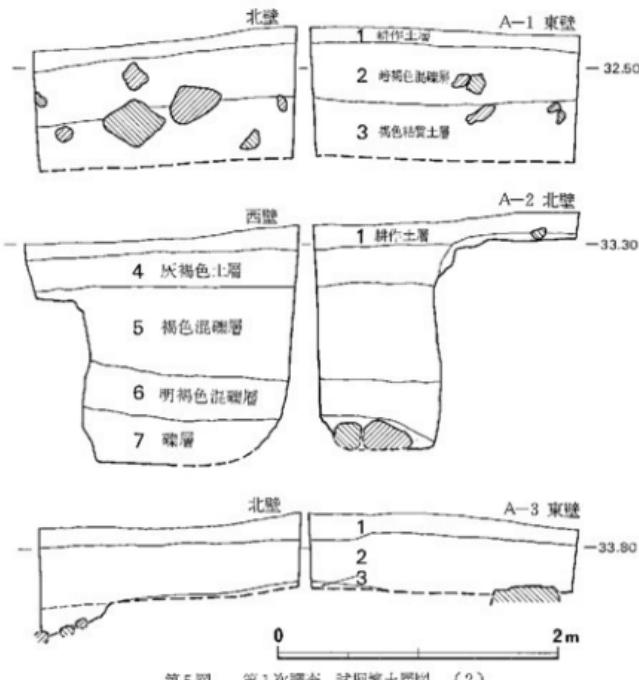


第4図 第1次調査 試掘横断層図 (1)

み様のものには、黒褐色の粘質土層が認められた。

F-13グリッドの黒褐色粘質土層からと、F-14グリッドの第2層から純文時代晚期の土器、さらにG-13グリッドの第3層からも同じく晚期の土器が出土した。

次に第2地点で(第5図)、ここも第1地点に似ており、表土層を第1層とし、第2層が暗褐色の混疊土層となっている。第3層は褐色の粘質土層で、この層も礫を含んでいる。A-2グリッドの土層については第2次調査の項に述べるが、これは第4層以下埋め土である。A-3グリッドでは3層がほとんどなく、地山を切り込んだ道傍らしきものが確認された。掘り込みの部分は、第2層と色が似ており、境が明瞭でなかったが、第2層より粘度が強い。後世の掘り込みの可能性も考えられた。



第5図 第1次調査 試掘柵土層図 (2)

## (2) 第2次調査の概要

第2次調査は、昭和56年9月21日から同11月14日まで、西有家町が調査主体となって、県文化課安楽勉・藤田和裕が担当して実施した。先に行った調査で、工事計画予定域内に二箇所の遺構・遺物包含層のある場所が判明したため、今回はこの二箇所の遺跡の記録保存のための調査を行うことを目的とした。

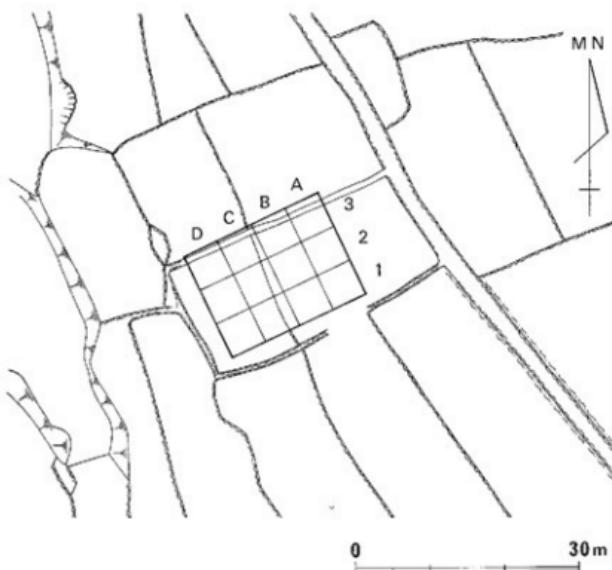
二箇所のうち北側の、丘陵西側斜面、須川1780-1番地他を第1地点、丘陵南端部の、須川五反田1688番地他を第2地点と呼称することにした。

第1地点 先述したように標高35~38mの間に位置し、現状は二枚に分れた畠地である。

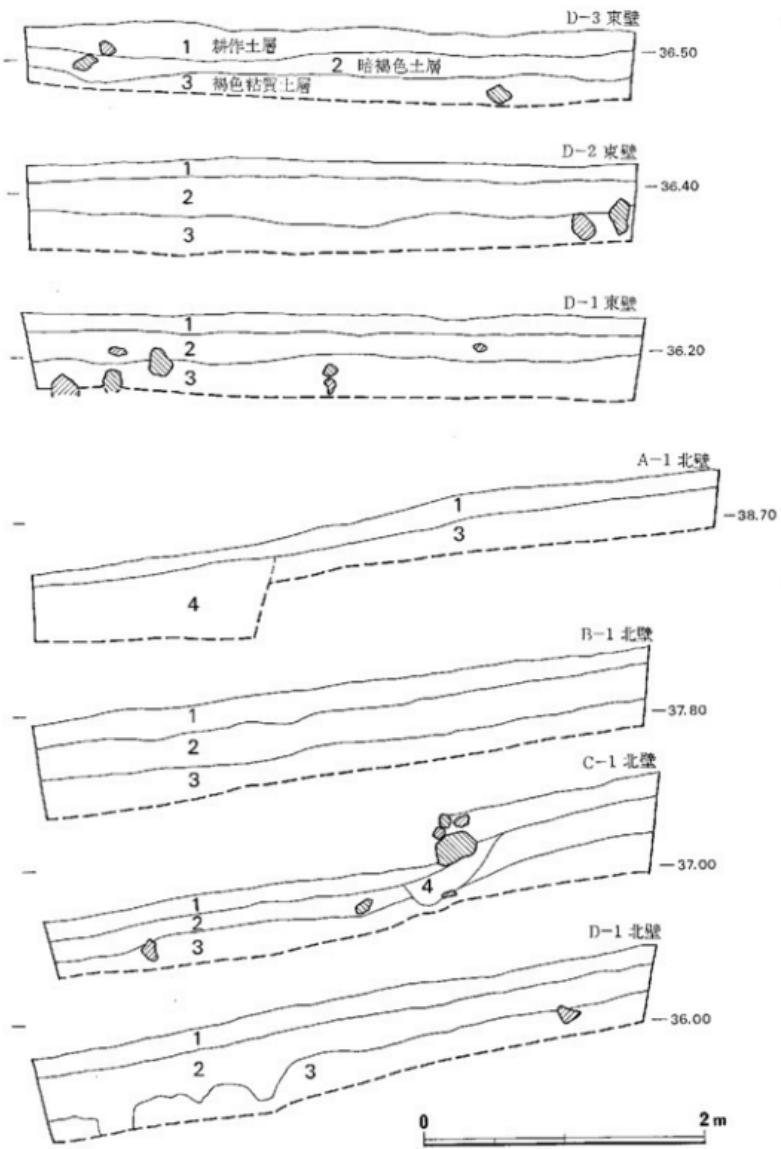
調査は、第1次調査に使用した13列を東西の基準線として使用することとし、G-13グリッド杭を基点として東・北にそれぞれ一辺5mずつのグリッドを東西に4列、南北に3列、計12個設定した。各グリッドは、東から西にA・B・Cとし、南から北に1・2・3として、その名称とした。(第6図)

### 土層(第7図・図版8・9)

第1地点の土層は、先にも簡単に記したが、第1層は耕作土でやや沙質がかった層である。



第6図 第2次調査 第1地点調査区域図



第7図 第2次調査 第1地点土層図

第2層は暗褐色の土層となっており、小さな風化礫を含んでいる。第3層が褐色粘質土層で、拳大の礫や指頭大の風化礫を含んでいる。D-3グリッドでは柱穴らしいものが検出されたが、どれも2層上面から切り込まれ、時期的に古いものとは考えられなかった。A-D列間の1列北側での土層の状況から見ると、この地点は西に約1/8の傾斜を持っている。そして、第1次調査の際判明した如く、丘陵尾根の高所では耕作土のすぐ下、地表下15~20cmで岩盤となり、今回調査の尾根上に近いA-1グリッドでも第2層の暗褐色土層がなく、第3層の褐色粘質土層となっている。第2層が流されてしまった可能性が考えられる。B-1グリッドでは、第3層の下部で色調が黄褐色に変わる傾向が認められ、これはこのまま地山となっている。C-1グリッドにおいても第3層下部は礫が多くなり、地山につながる。ここで第4層は、畑境の石垣を築く際の擾乱層である。D-1グリッドでは、第3層にかなり大きい礫も認められた。ここでも柱穴状のものが認められたが、これも第2層から切り込まれていた。遺物がなく、その時期は不明であるが、さほど古いものとは感じられなかった。D-3、D-2グリッドの柱穴状のものと合わせてみても、相互間の規則性等は見出せなかった。

#### 遺物出土状況

耕作土層を除いて、面的な遺物の出土状況は各グリッドで進いが認められた。まず、数量的に多かったのはB-2、B-3グリッドで、B-2グリッドでは石器の出土数量も多く、石斧の出土量は第1地点での2/3を占めている。D-1グリッドからの出土遺物の数量も多かったが、図示できるものの数は少なかった。B-2、B-3グリッドはその間付近にかなりまとまった状況で、D-1グリッドでもある程度のまとまりの中に出土した。この遺物の集中する傾向を示す場所は、ゆるいレンズ状の落ち込みをなし、黒褐色を呈する土層となっていた。しかし、これは人為的な掘り込みとは認められず、自然のくぼみと観察された。

歴位的な出土状況では、第3層からの出土が多く、第2層・表層からは少ない。土器・石器とともに、表土層・第2層中からの出土は認められるが、これは第3層上面に達する擾乱の結果と考えられ、基本的には第3層を縄文時代晚期の遺物包含層とすべきものであろう。しかし、この第3層の周辺への抜がりはさほど大きくなれば認められず、今回調査分でもA列がその京端に当ることが確認された。南北方向の抜がりもさほどでないことは、第1次調査によって確認していたところである。

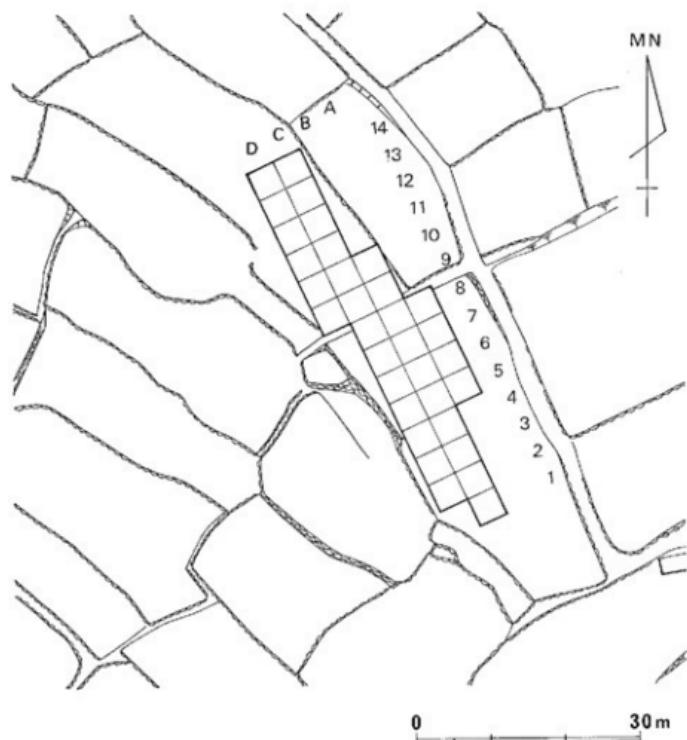
第2地点 標高31~34mの間に位置する、丘陵南端に近い緩やかな西側斜面で、現状は畠地である。ここでも、第1次調査に使用したA列と2列との交点を基準点とし、A列と2列を基準線としてグリッドを設定した。地形上の制約で、ここは4m×4mのグリッドを基準の大きさとして使用した。調査の範囲は、南北では第1次調査時のA-0グリッドの南から、北側は、同じくC-3グリッドとC-4グリッドの間までである。東側は、A列のすぐ東側まで工事が行われて切り落とされていたため、そのままA列を開始した。また西側は、第1次調査の際に、一段低くなった畠地に何らの遺構・遺物包含層ともに認めなかっただため、D列ま

でとした。

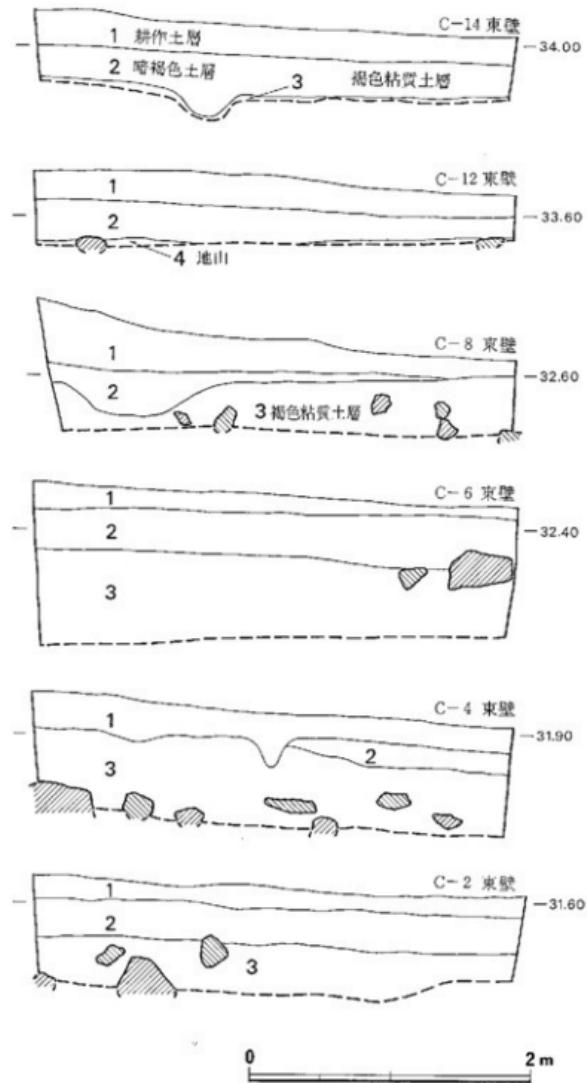
それぞれのグリッドは、東から西へA・B・C・Dとし、南から北へ1・2・3……として14列まで設定し、その交点の両者の記号を付して呼んだ。調査を実施したグリッドの数は、33個である。（第8図）

#### 土層（第9・10図、図版22～24）

尾根の頂部に近い場所の、北から南にかけての土層を図示した（第9図）。第1層は耕作土層で、灰褐色を呈するやや砂質がかった層であるが、C-14・C-13・C-12グリッドでは、常時耕作されている部分とそうでない部分に分けることができる。第2層は暗褐色土層である。この層は、第1次調査で確認したところでは、C-14グリッドのすぐ北側では消滅してしまい、耕作土の下は風化巖の岩盤となっている。第3層は、褐色の粘質土層で、大小の礫を含



第8図 第2次調査 第2地点調査区域図



第9図 第2次調査 第2地点土層図 (1)

んでいる。この層も、C-14・C-12グリッドでは非常に薄くなり、第2層と同じように北側にゆくにつれ、薄くなり、消滅する。C列の6・4・2グリッドでは、2層、3層はかなり厚いが、C-4グリッドの北側では一部2層がなくなっている。この近辺の第3層は人頭大以上の大型の礫を含んでおり、北側に較べると粘質の度合が強い。

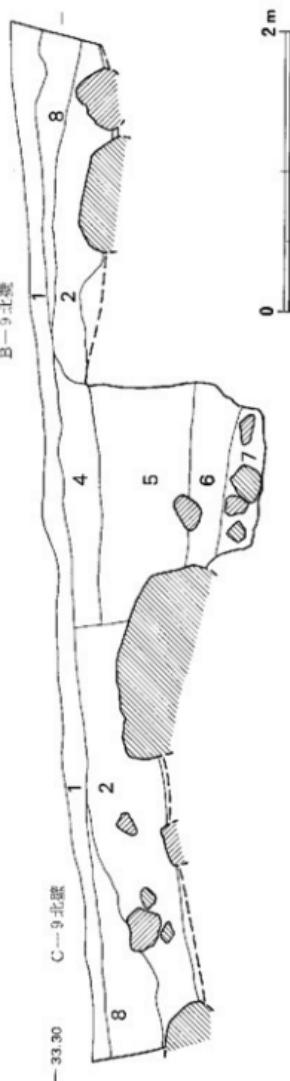
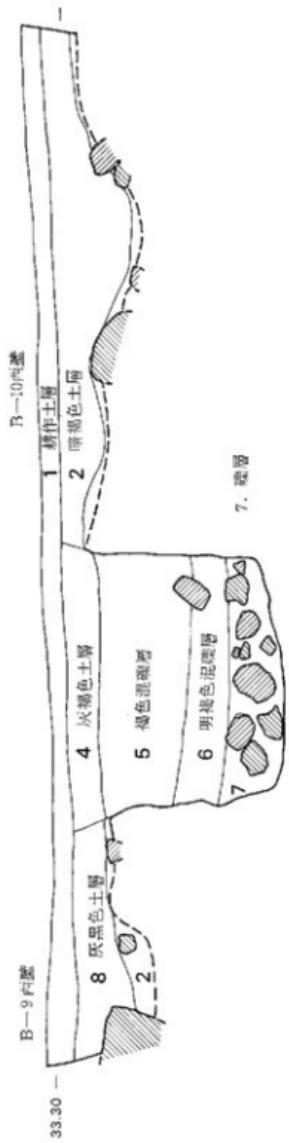
B・C列の9・10グリッドにかかるて検出した不明土壌については、後に詳述するが、この周辺の土層を第10回に示した。耕作土の第1層と暗褐色土の第2層は、他のグリッドとも同じであるが、B-9グリッドの西壁とC-9・B-9グリッドの北壁には1層と2層の間に灰黑色土層がある。土壌は、2層と灰黑色の土層を切り込んで掘っており、この中は大きく4層に分けることのできる土がつまっている。最上層の第4層は灰褐色を呈しており、灰褐色土層に色は似ているが灰白色の小豆大的風化礫を含んでいる。第5層は褐色混疊土層でかなり厚くなっている。場所によって暗褐色・黄褐色を呈する部分もある。6層は明褐色混疊層で、さらりとしてしまりがない。指頭大から拳人の礫の多い層である。最下層の第7層は漂層で、人頭大の礫の間に拳大から指頭大の礫が混じっている。大きな礫の下面には空隙が残り、これらの礫・土が埋められてさほど時間的な経過がないことを示している。また、これらの土や礫が、時間をかけて入れられたものでもないことがわかる。

第2地点は南々東に約1/17のごく緩い角度で傾きを持ち、西南西の方向へは約1/11の角度で傾いている。しかしこの両方向とも、先端部分はかなり急な傾斜となっている。

#### 遺物出土状況

第2地点での遺物の出土の状況は、特別の傾向は示さない。図化できた遺物の数量のみからすれば、C-7グリッドにやや集まるように思えたが、他に抜き出るというほどではない。また、出土する土器は第1地点に較べるとかなり数が少なく、散発的に出土し、それも時代的にかなりの開きのある遺物である。畠地にする際にかなりの擾乱を受けたものと思われた。石器の場合も、C-7グリッドの第3層から合形様石器が出土しているが、すぐ隣のC-8グリッドにおいては表土層で検出している。

層位的な出土状況からすれば、第3層からの出土が多く、この層を一応遺物包含層としてとらえることも可能であろう。しかし、同じ第3層中から、時期的に明らかに差異のある遺物が出土していることからすれば、整層としての文化層とはとらえ難い。近年とは考えられないが、かつて、一度ならずこの周辺は、遺物の移動を伴うような擾乱を受けたことがうかがわれる。



第10圖 第2次測量 第2地點土壤圖 (2)

## 4. 遺 物

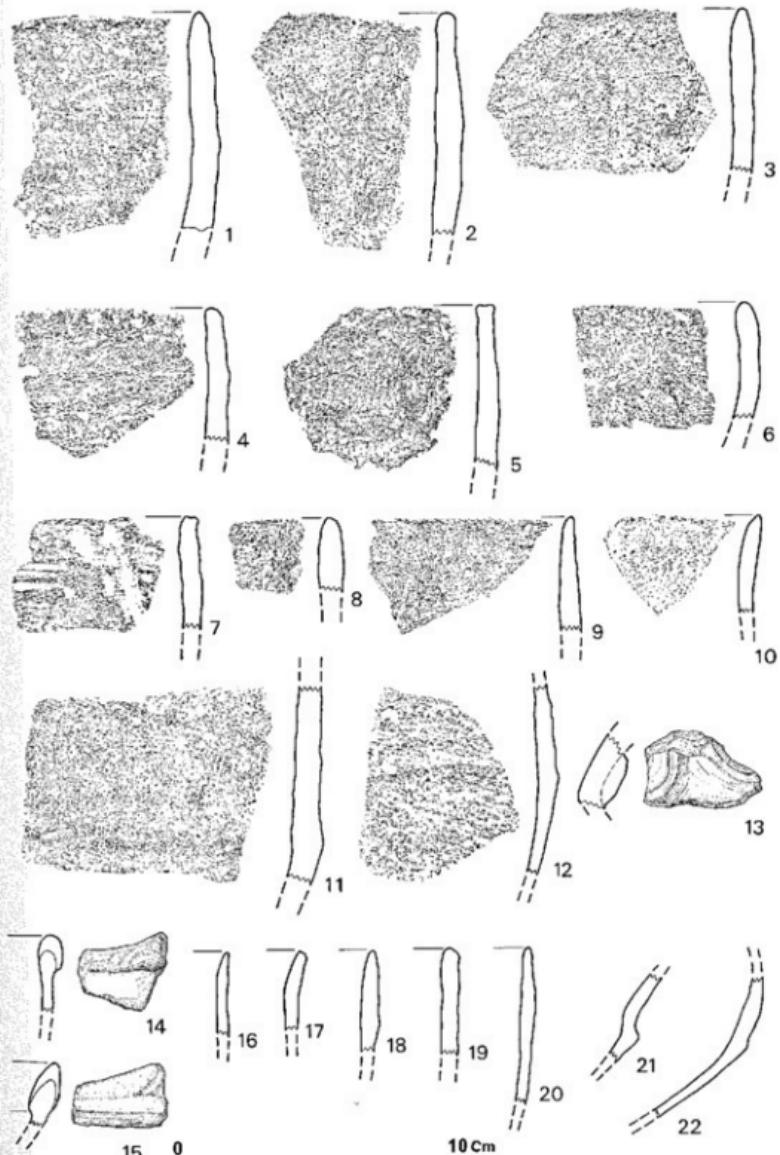
### (1) 第1地点出土の遺物

#### 土器 (第11・12図, 図版13・14)

本遺跡出土の土器は第1地点と第2地点において様相を異にしている部分がある。前者が縄文時代晚期の粗製土器を中心としているのに対し、後者は厚手の粗製無文土器と、若干の晩期および弥生式土器、さらに中世に至る遺物の出上がみられた。二箇所の地点より出土した土器は、包含層における保存状態が極めて悪く、器表面が著しく風化磨滅し荒れているものが多い。第1地点ではB-2・3、およびD-1グリッドにおいて土器が集中して出土した。以下出土七器について述べる。

#### 粗製土器 (第11図1~13)

1・口縁部で口唇はやや尖り気味に丸くおさめられ、外面は荒れておりわずかにスス状の黒いものが残っている。内面はヨコに条痕調整されており、全体の形状は胴部からゆるく「く」字形に弯曲すると考えられる。胎土には角閃石、石英粒などの微粒砂を含み、焼成はやや甘く、色調は内外とも茶褐色を呈す。(拓影は内面) 2・口唇部は丸くおさめられ、外側にゆるく絞ったように浅く回み、胴部はわずかにふくらむ。胎土は角閃石、石英粒が目立ちやや粗い。焼成もやや甘く内外の器壁も荒れ、色調は褐色を呈する。3・口唇はやや尖り全体的に器壁は薄い。内外とも粗い条痕調整が観察されるが毫滅で荒れている。胎土は角閃石、石英粒、白い微粒砂が混在するが、焼成甘く、口縁は黒ずんでいる。色調は全体的に茶褐色を呈する。4・口唇部は丸く、器壁内外ともススの付着を見る。また外側は粗い調整痕の上を、さらにヘラ状のもので調整されているが、荒れが目立つ。胎土は石英粒が目立ち焼成は良好。5・口唇部は平坦で内面直下で弱い一本の線で区切られ、これはヘラ磨きの痕跡と考えられる。外面もヘラ磨きされているが器底はヒビ割れが目立ち荒れている。胎土は石英粒と白い微粒砂が混り、焼成は甘く、色調灰黒色を呈す。6・口唇は丸くおさめられ器形も丸くふくらむ。胎土には角閃石、石英粒を含むが一番目立つのは白い軽石状の粒子で、これは包含層下部の埴山層の岩を使用したと思われる。胎土はしまっているが焼成はやや甘く器表は荒れている。1~6の土器は、口縁から胴部にかけゆるいふくらみをもつ点で共通しており、中鉢の形態をとるものと思われる。7・口唇部は平坦で調節部に直行する。内外とも条痕が走るがその上をヨコナデ仕上げされている。胎土には石英粒、角閃石を多く含むが焼成は甘くもろい。色調は赤褐色を呈す。8・口縁の小破片であり、胎土には角閃石、白い軽石状の砂粒を含み、胎土焼成とも良好。色調は褐色を呈す。9・口縁部はわずかに外反し、口唇部は丸くおさめられ、器壁薄く直線的である。胎土は石英粒、角閃石を含むが極めて精製され緻密である。焼成も良好で色調黄



第11图 第1地点出土石器实剥图 (1)

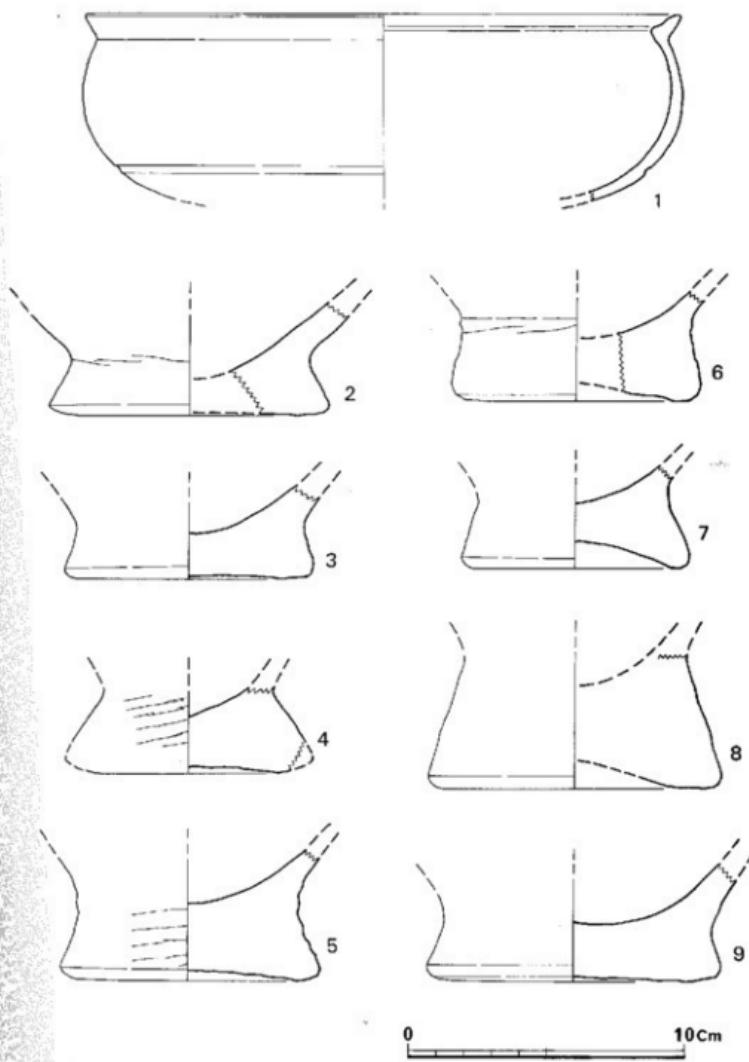
褐色を呈す。10・口唇はやや尖がり、内窓し、口縁はラッパ状を呈すると思われる。胎土には黒曜石粒、角閃石を含み、焼成は甘く、褐色を呈す。7~10の土器は口縁が直行、もしくは外反する共通性をもち、「く」字形の脣部につながるものではないかと考えられる。11・大形の「く」字形の脣部であるが、刻目にもたない。胎土には石英粒、黒曜石粒、角閃石を多く含み、しまっている。焼成はよいが器表は荒れ、色調黄褐色を呈す。12・「く」字形を呈する脣部で、脣上部は条痕による調整が施され、下部には見られない。器壁は薄く、大形にならない。胎土には石英粒、角閃石、白い砂粒が多く含むが焼成でもろく、焼成も甘い。色調は内外とも暗褐色を呈す。13・「く」字形に張り出す脣部のくびれ部に螺旋状の貼り付け突起をもつ。突起は指頭で整形され、ナデで仕上げられ、内面には若干のススが付着している。胎土はよくしまり焼成も良く色調暗褐色を呈す。

1~13は粗製土器であり、總じて器表面が荒れている。胎土の共通性は、石英粒、角閃石、黒曜石粒、軽石状の白い砂粒が主に含まれていることで、いずれも周辺の既述遺跡出土の土器と同じ様相を呈している。

#### 精製土器（第11図14~22、第12図1）

ここにあげた精製土器は器表面が磨滅し荒れ、研磨部分が剥落しており、一見粗製土器の觀を呈しているが、胎土は緻密である。

14・リボン状の山形突起を有する浅鉢で器表面は荒れているが、胎土は細かい石英粒や白い砂粒子を含んでいる。内面にはヘラ磨きがわずかながら観察でき、色調黒褐色を呈す。15・14と同じリボン状の山形突起を有する浅鉢で、14が左から右上りに対し、15の突起は左から右下がりであり、内外面とも浅い沈線で区切られている。胎土は良好だが焼成甘く表面黄褐色で、断面は黒色を呈す。16・口唇に尖がり、口縁はやや外反し器壁は薄く研磨が施されている。胎土には白い砂粒を多く含み焼成は良好、色調は黒色を呈す。形状は塊および浅鉢状になると思われる。17・口唇部は平坦でわずかに外反している。胎土は良好だが焼成が甘いので、器表がやや荒く観察される。脣部にかけてはやや丸味を帯びてるので、塊状になろう。18・器表面は殆ど剥落し、荒い面のみ残る。脣部にかけてくびれ部が残っているので、塊状になる。胎土、焼成とも良好色調は黒色を呈す。19・外面は殆ど器表面が剥落しているが、口唇部直下に浅い一条の沈線をめぐらす。内面には一部に研磨の痕跡をとどめている。口縁から脣部にかけ直行し、中鉢の形状を呈し、色調は内外とも黒灰色。20・器號は剥落のため薄くなっているが、口唇は丸くおさめられ、胎土は精製されている。脣部にかけてややふくらみ、塊状を呈し、色調は内外とも黒灰色。21・「く」字形に張り出した脣部分で、口縁は外反する浅鉢であるが、底部と口縁部を欠く。脣のくびれ部から上方にかけて器壁は厚みを増す。内面は剥落しているが外面は研磨されている。胎土良好だが焼成やや甘く、色調は内外とも灰褐色を呈す。22・脣部が丸く張り出した部分に沈線を一条めぐらす。沈線を中心に上部が器壁厚く、下部は薄い。



第12圖 第1地点出土土器尖端圖 (2)

胎土には石英粒、角閃石を多く含み、器表は荒れ、色調暗褐色を呈す。第12図1・口縁は外反した尖り気味の部分と、一段低い内面に向けられた部分のいわゆる二道口縁を呈し、頸はよくしまっている。腹部は丸く張り出し、下部の方に浅い一条の沈線をめぐらす。器表面は剥落して荒れているが胎土は精選されている。焼成は甘く、内外とも黒灰色を呈す。第11図22とは同一個体であろう。

第11図14~22、および第12図1は精製上器として取り上げたが、保存状態が悪く特徴的な明確さを失くが、浅鉢と塊状のものに限られる。

#### 底部（第12図2~9）

底部の総数は少ないが、大別してやや張り出しをもつ円盤状になるものと、高台の上げ底状になるものに区別され、粗製深鉢や瓢形が殆どである。

2・平坦底をなし、平坦部には条痕が施されている。胸部へ立ち上がるくびれ部は角度が小さく、胸部分が大きく張り出すことがわかる。胎土、焼成とも良好で色調淡褐色。3・ほぼ平坦面を有し、底尻はあまり張らず胸部への立ち上がりも角度が大きい。内面には条痕がわずかに見られ、ススの付着を見る。胎土、焼成とも良好で、器面もしっかりしており、色調外面暗黄褐色、内面灰褐色を呈す。4・高台のややあげ底で内面は剥落し荒れている。外面は員盤状のもので押し引き調査が施されている。あまり保存がよくななく、器表は荒れている。胎土には角閃石、白い砂粒を多く含み、焼成甘く、色調赤褐色を呈す。5・高台のややあげ底を有し、高台部分に粗い条痕文が施されているが、脇部に移行する部分には見られない。内面はナデによる仕上げが行われ、胎土には白い砂粒、角閃石を含み、焼成も良く、色調外面は淡赤褐色、内面は黄褐色。6・かなり消耗を受けた上げ底の高台で、内外面ともに灰褐色、焼成は甘い。7・中形の高台様の上げ底で、外面は磨耗し、赤褐色で内面は灰黒褐色を呈す。胎土、焼成とともに良好。8・高さ5cmに達する上げ底を有する高台部分で、大形になる。胎土は緻密で精選され、焼成も良好である。9・土地区画整理区終了地からの表採品である。直徑10.5cmの大きな甌形土器の平底である。胎土には粗い石英粒を多く含み、焼成は良好であるが、器表面は荒れている。色調は内面褐色で外面は赤褐色を呈す。

島原半島における網文陶器の資料は、裸石原遺跡、山の寺遺跡、原山遺跡をはじめとして、  
（註1）  
（註2）  
（註3）  
近年調査された小浜町朝日山遺跡、さらに海中に没する堂崎遺跡などがあげられる。また時間的な問題は縄文晩期II式からIII式に移行している。第1地点における出土土器を整理すると、量的には少ないが甌、鉢、浅鉢形の土器がセット関係を成す。無文土器が殆どであるが、縁エクタイ状の突起や「く」字形に屈曲する胸部、あるいは浅鉢などから比較して、本遺跡も晩期II式の時期に比定されよう。

- 註1 百人委員会「磯石原遺跡」一兜文後期農耕文化の様相—百人委員会埋蔵文化財調査報告第7集  
1977
- 2 百人委員会「山の寺発掘遺跡」百人委員会埋蔵文化財調査報告第1集 1973
- 3 「医指定史跡原山支石墓群 環境整備事業報告書」北有馬町教育委員会 1981
- 4 小浜町教育委員会「朝日山遺跡」小浜町文化財調査報告書第1集 1981
- 5 1980年～1981年長崎県教育委員会調査、縄文時代腕輪を主体とした海中干潟遺跡、礫器、石錘など多數出土。長崎県文化財調査報告書 第58集

#### 石器（第13～15図、図版15～18）

第1地点では、スクレーパーおよび剝片の量が多いが、これは第2地点も同じ傾向である。馬平打製石斧が6点出土しているのは特異な現象と思われる。

#### ナイフ形石器（第13図1、図版15）

黒曜石製で、先端部をわずかに欠失している。バテナはやや古い感じを受ける。現存長3.4cm、幅1.4cm。重さ3gである。A-1グリッド3層からの出土。

#### 石核（第13図2、図版15）

灰色で不透明な黒曜石である。一部に自然面を残している。B-2グリッド3層から出土。

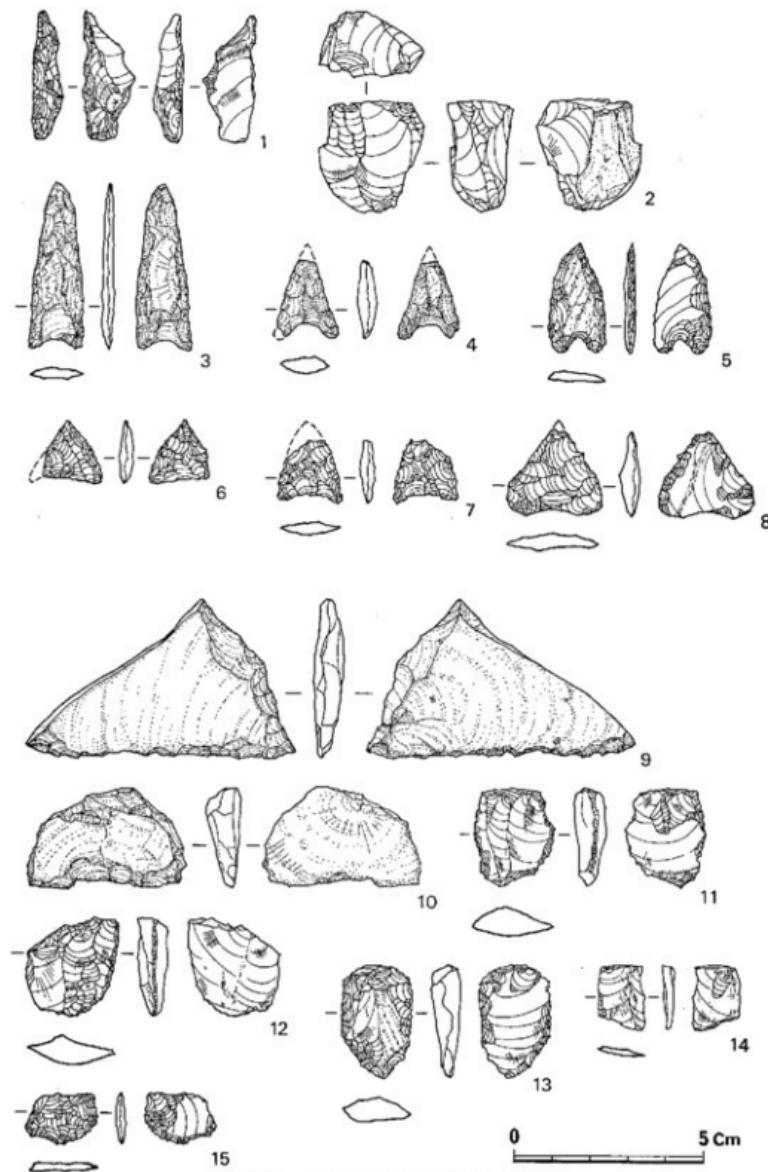
#### 石鎌（第13図3～8、図版15）

3はサヌカイト製で先端部が欠失している。長さ4.3cm、幅1.4cm。重さ2.3g。4もサヌカイト製で、先端と脚部を欠いている。長さ2cm、幅1.7cmくらいになるものと思われる。5は黒曜石製の剝片鎌で、片面に自然面を多く残している。6・7・8ともに黒曜石製であるが、7は表面の風化が進んでいる。3以外は全て先端部を欠失している。6が一番軽く0.8g、7が0.9gである。

3はB-3グリッド、4はD-2グリッドの3層から出土。5・6はC-2グリッドの2層から、7はB-2グリッドの表土、8もD-2グリッドの表土から出土した。

#### スクレーパー（第13図9～15、図版16）

9は、幅7.1cm、厚さ7mmのサヌカイト製。両側から剝離を加えて刃部を作り出している。10は、灰色で不透明な黒曜石製で、幅4.2cm、厚さ9mm。一部に自然面を残している。これは片側からの剝離で刃部を作り出している。刃部の中央部に、使用時による欠損と思われる部分がある。11・12とともに良質の黒曜石で、長さも同じく2.6cm。11は両側縁部を使用したらしい痕跡がある。12も側縁にこまかに刃溝と思われる痕跡がある。13 黒色で良質の黒曜石で、一部に自然面が残る。両側縁部を使用したものであろう。14は下部に使用痕と思われるものが残っている。上面には自然面が残っている。15 灰色の縞のある黒色の黒曜石製である。1.3×1.9cm、厚さ2.9mm。表面は各方向から押圧剝離を行い、裏面も剝片であった部分を大きく残しているが、ここも周辺に押圧剝離を加えている。9はD-2グリッドの3層から、10・11・13は第1次調査の際出土したもので、10はG-13bグリッド、11はH-12グリッドのそれぞれ



第13圖 第1地點出土石器實測圖 (1)



第14図 第1地点出土上石器実測図 (2)

表土層から、13はG-13グリッドの2層からの出土である。12・14はB-2グリッドの3層から、15はC-2グリッドの2層からの出土である。

剥片・使用痕のある剝片（第14図1～9、図版17）

1・2とも良質の黒曜石で、両側縁部を使用した痕跡を持つ。1は第1次調査のF-10グリッドから、2はC-2グリッドの2層からの出土である。3は半ば透明に近い黒曜石で、小形の分銅形を呈する。くびれの部分に使用痕が認められる。4も黒曜石で側縁部に使用痕がある。3・4ともに第1次調査H-12グリッドの表土層からの出土。5も良質の黒曜石。肉側縁部に使用痕がある。D-1グリッド2層からの出土。6・7ともに良質の黒曜石。報長の剥片で、6は長さ3.1cm、7は3.0cm。ともにB-2グリッドの3層からの出土である。どちらも側縁部に使用痕と思われるような痕跡があるが、断定はしがたい。8も、6・7と同じような報長の剥片であったと思われるが、途中で折れている。側

縁部に使用痕と思われる部分がある。第1次調査時のI-1グリッドの2層からの出土である。9も同じく黒曜石の縦長削片。途中で折れて下半分を失っている。

#### 有孔石製品（第14図10、図版30）

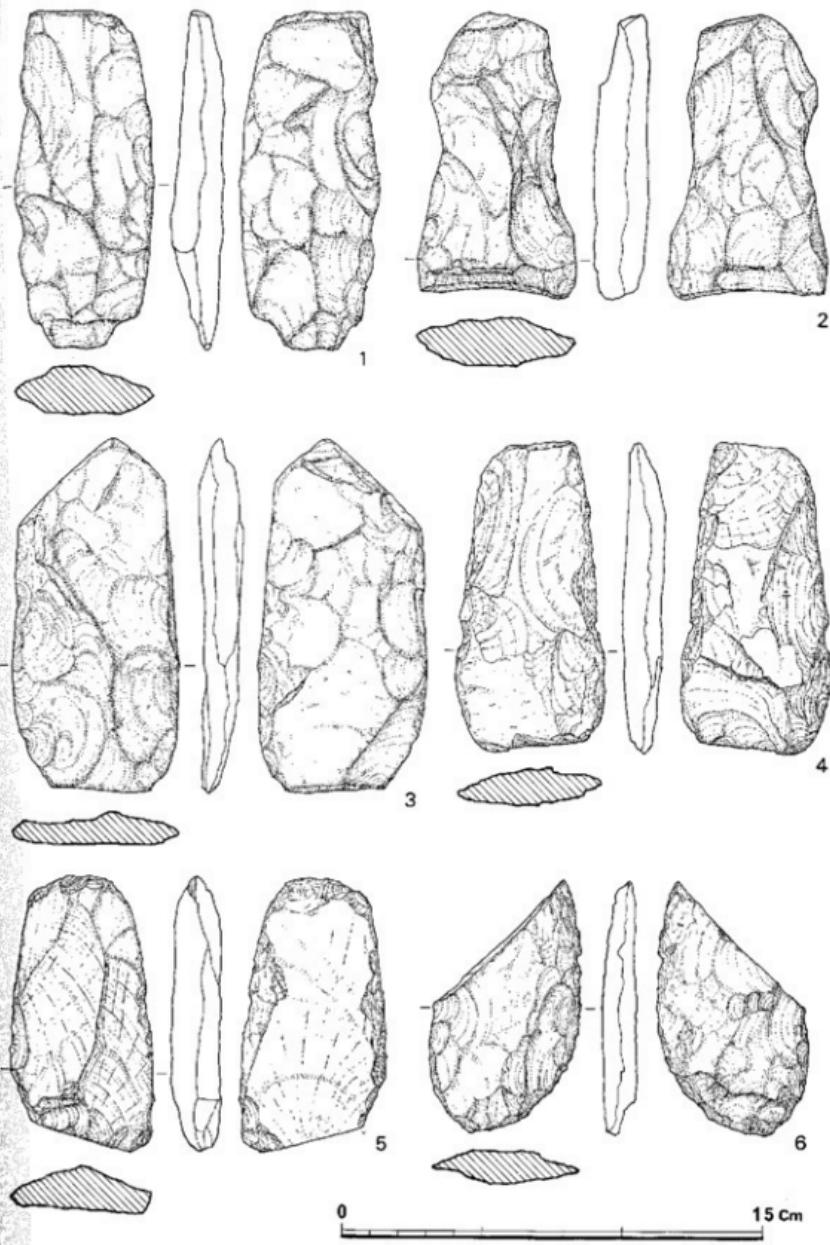
B-2グリッドの3層からの出土である。硬質の粘板岩の一種のようであるが、岩質は緻密でみかけより重く感じる。重量395g。平面図で見ると、長径8.6cm、短径7.7cmで、若干形の崩れた六角形を呈する。厚みは4.6cm。中央部に近く、斜めに、径10~12mmの穴がある。全体的に自然のままの面を残しており、使用目的は不明である。

#### 石斧（第15図1~6、図版18）

全て打製石斧である。材質は1~3は玄武岩、4~6は安山岩である。

1 全長12.1cm、幅5.0cm、厚さ1.8cm、重さ119gを計る。短冊形をしており、表面の風化がかなり進んでいるが、両側縁部から調整した痕跡は観察できる。完形品である。2は、いわゆる漫形をなすものであるが、刃部付近から折れている。現存長10.2cm、幅5.7cm、厚さは2cm。これも表面の風化が著しいが、側縁部からの調整のあとはうかがえる。3も短冊形をなす完形品である。長さ12.6cm、幅6.0cm、厚さ1.6cm、重さ135gである。1・2と同じように表面の風化は進んで黄褐色を呈し、やわらかくなっている。4も短冊形で、両側縁部から調整している。刃部には使用痕と思われる痕跡があり、また、打痕によって生じたと思われる刃部方向からの剥離が残っている。ほぼ完形である。長さ12.1cm、幅5.3cm、厚さ1.5cm、重さが108g。5 刃部を折損している。縦方向に荒く削った素材を両側縁から調整しているが、一部自然に割れた部分を残している所もある。これも短冊形である。現存長9.8cm、幅5.2cm、厚さ1.8cmである。6 4・5とは感じの異なる石質であるが、安山岩系の岩石であろう。形は半分ほどを欠失して不明であるが、刃部と思われる部分は丸みを持っている。これも両側縁部から調整して作っている。刃部に、使用による破損と思われる部分が認められる。幅5.4cm。ほぼ完形のものまでいって、1・3・4の重さの平均は120gである。

1・2・4・5はB-2グリッドからの出土で、2は表層から、1・4・5は3層からの出土である。3はB-1グリッドの3層から、5は第1次調査時にF-13グリッドの2層から出土した。



第15圖 第1地點出土石器實測圖 (3)

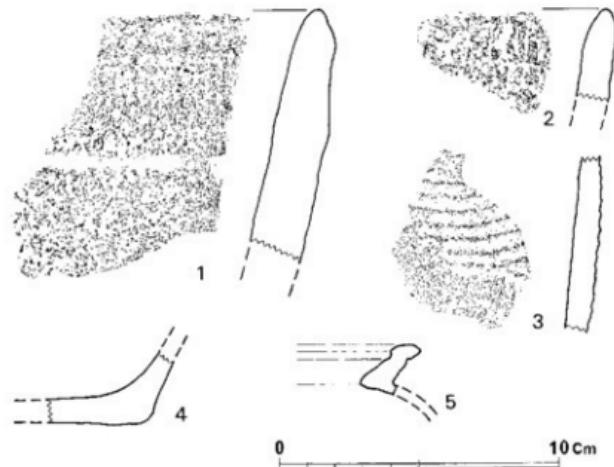
(2) 第2地点出土の遺物

土器（第16・17図、図版25）

縄文式土器（第16図、図版25）

第2地点出土として示した土器はわずかであるが、これ以外の無文土器の出土はかなり多かった。この土器群も風化著しく器表が殆ど荒れている。

1・口唇はやや尖り気味に外側に弱く張り出しており、胴部へ直行する。この部分には粗い条痕がタテに整然と施されているが、かなり風化を受けわずかにそれと観察できる。器壁は厚く、胎土は粗く、焼成も甘い。色調は内外とも茶褐色を呈し、内に若干のススの付着を見る。2・風化著しい口縁部である。外面に爪形文類似の文様がわずかに残るが判然としない。胎土には角閃石、石英粒、白い砂粒を含み粗いが、焼成は甘く、色調褐色を呈す。3・胴部に浅い沈線様の溝が數条認められる。はっきりとしないが条痕とは違うようで、器形は円筒土器になると考えられる。胎土には角閃石、白い砂粒、黒曜石粒を含み、良好で焼成も良い。色調は外面淡黄褐色、内面灰黄褐色。4・底部であるが、平坦部から直接立ち上がる。円筒形土器あるいは無文土器の底部と考えられる。胎土に白い砂粒、角閃石を含み、焼成は良い。色調は内外とも黄褐色。5・二重口縁になる黒色研磨土器の口唇部分である。丁寧にヘラ磨きされ、色調は灰黑色を呈す。第2地点では他にも晩期土器の小破片が数点あり、包含層は認められず、流れ込みによるものと見られる。



第16図 第2地点出土土器尖削図 (1)

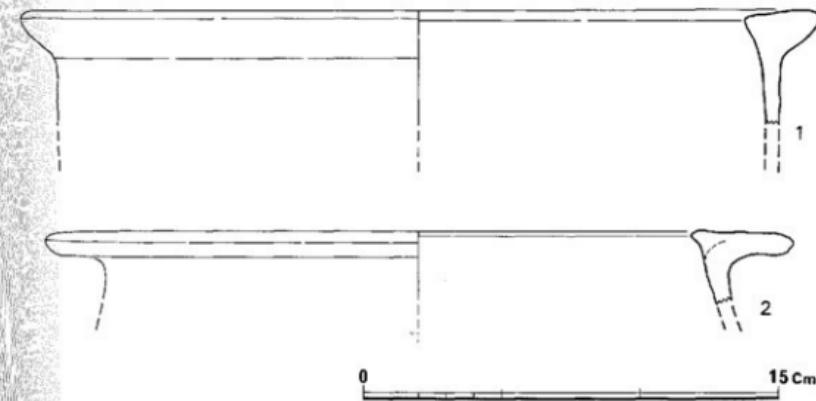
第2地点出土の厚手無文土器群は胎土、焼成が晚期のものとは明確に区別される。これまで県下において早期の時期の調査例が少なかったが、最近九州横断自動車道の調査、隣接する中核工業団地等の調査、さらに島原半島の北側に位置する吾妻町弘法原遺跡の調査などで良好な資料の増加がある。またこれらの遺跡は押型文土器をはじめ塞ノ神式土器、平柄式土器などの南九州的な要素を強くもった土器が多く出土し、集石造構などを伴い、早期後葉の時期に比定され、第2地点出土の厚手無文や条痕をもつ土器群も集石造構などを伴っており、この時期に比定されよう。

島原半島南部地域においては、押型文土器を中心とする早期から前期にかけての調査は遅れているが、隣接する有家町藤原遺跡などでは押型文土器なども採集されており、今後類例の増加が望まれる。

#### 弥生式土器（第17図 図版25）

調査区西側のB-5グリッド、C-2グリッドにおいて若干の弥生式土器の出土を見た。出土層は以前に畠地が整地された時に流入したものらしく、埋め土中の搅乱部分からであった。いずれも口縁部分で須久式であり、中期中葉から後葉にかけての特徴をもつ。

1・復原口径29cm、口縁は平坦で外傾しておりわずかに内側に尖がりをもつ。口縁断面は三角形を呈し、肩部は丸くふくらむ。内外ともやや磨耗を受けているが、わずかにススの付着を見る。胎土には石英粒を多く含み、焼成良好。色調内外とも黄褐色を呈す。2・復原口径27cmを測る。口縁は平坦で外側にわずかに傾斜する。また内側をわずかに引き出し弱い錐先状を見せる。肩はゆるく張ると思われるが突堤は不明、ヨコナデの調整がわずかに觀察される。



第17図 第2地点出土土器実測図 (2)

胎土には石英粒を多く含み、よくしまり、焼成は良い。色調は淡黄褐色。

本遺跡では包含層が認められず、弥生時代の生活址としての実証は得られなかったが、他から流入した可能性もある。島原半島南部地域におけるこれまでに調査された遺跡として、口之津貝塚（註1）、津町口之津貝塚（旧称三軒屋貝塚）、南有馬町北岡金比羅神遺跡、北有馬町今福遺跡、島原市景幸園遺跡などがあげられ、北九州的要素と東九州的要素の影響を受けた、有明海を中心とした地理的な特性が明らかになって来ている。

- 註1 古田正隆「口之津貝塚及び口之津烽火遺跡調査報告」百人委員会埋蔵文化財調査報告第5集 1975  
2 古田正隆「北岡金比羅神遺跡調査報告」南有馬町文化財調査報告第1集 1981  
3 1978年3月～1981年12月まで長崎県教育委員会調査、弥生時代後期の土器、石器、中性から近似に至る遺構など多数出土。報告書1983年刊行の予定。  
4 小田富士雄「島原半島景幸園の遺物」考古学報誌、第45巻第3号 1960  
古田正隆「三ヶ丘野景幸園遺跡」島原市三公の弥生文化一島原市教育委員会 1963

#### 石器（第18～20図、図版26～30）

第2地点でも多種の石器が出土している。数量的には石鏃と、スクレーパーおよび使用痕を有する剣片が多い。

#### ナイフ形石器（第18図1、図版26）

人形である。長さ6.1cm、幅2.8cm、厚さ1.4cm、重さ12gある。背部に自然面を残しており、この部分にプランティング様の、ほぼ一方から加工が認められるが、製作時の困難より新しい感じも受ける。基部にも通有のナイフに認められる加工はない。刃部にあたる部分には、刃に対して直交する方向からの刻離が残り、使用に際しての欠損かとも考えられる。通有のナイフ形石器とは異なる点もあるが、一応ナイフ形石器として取り扱った。黒曜石製。

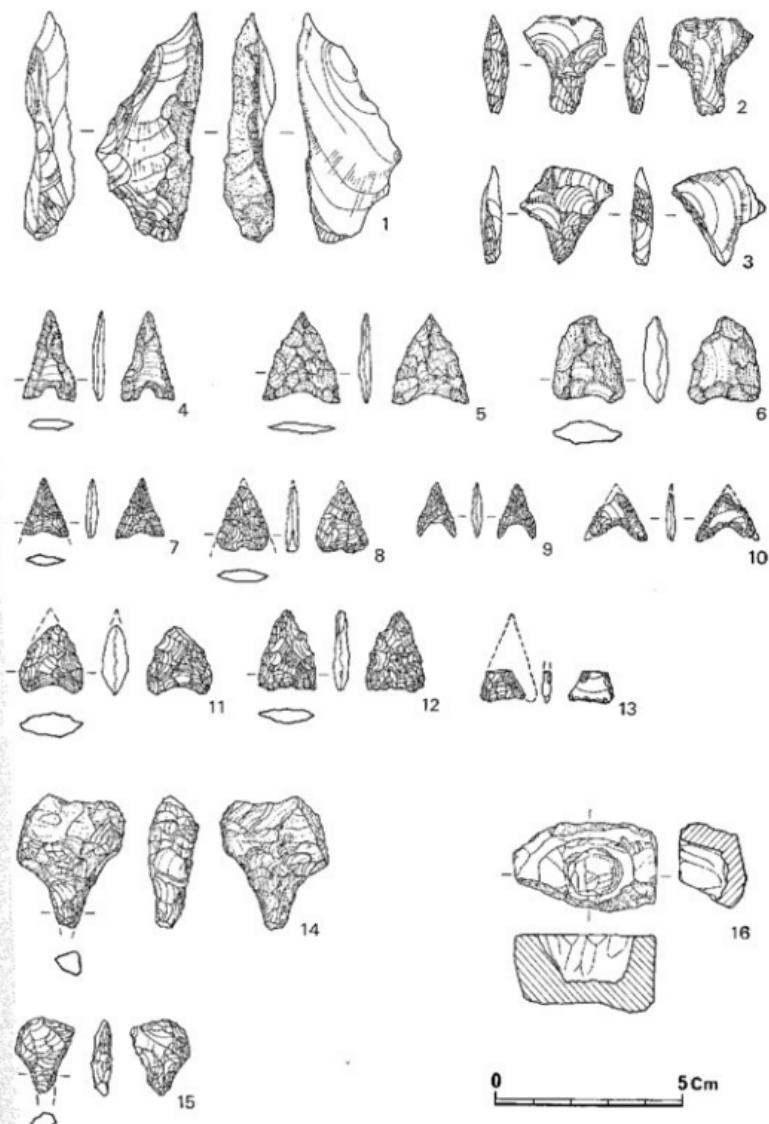
#### 台形様石器（第18図2・3、図版26）

2・灰色の縞のある黒曜石製で、バテナは古い。表面・裏面とも横方向からの刻離面を残しており、両側縁を調整している。縦2.6cm、幅2.2cm、厚さ7mmである。C-8グリッドの表土層からの出土である。3は透明な部分を持つ黒曜石製である。表面は両側縁から荒く刻離を行い、裏面は横方向からの刻離面を残している。左側縁部は裏面から、右側は表面から調整を施して整形している。縦2.6cm、幅2.5cm、厚さ6mmを計る。C-7グリッドの3層からの出土である。

#### 石鏃（第18図4～13、図版27）

各種の形態を持つ石鏃が出土している。材質は4～6がサスカイト、他は黒曜石である。

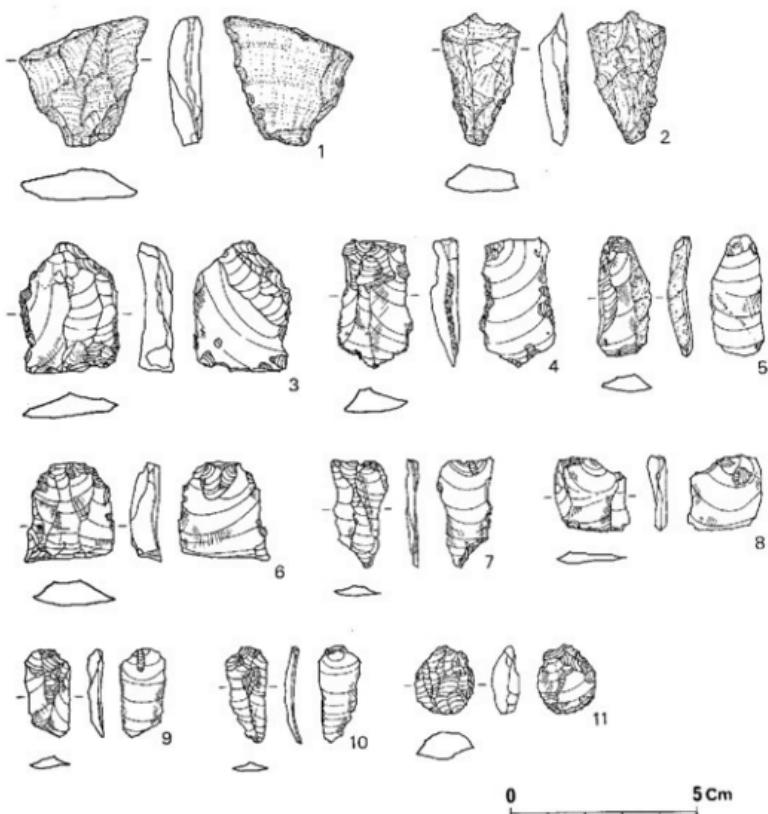
4は抉りを持つ形で、表面の風化が進んでいる。5・6はやや黒っぽい色を呈している。6



第18图 第2地点出土石器实测图 (1)

は、厚さ7mmほどの厚みを持ち、雑な作りである。7は灰黒色の不透明な黒曜石で、押圧剝離によって丁寧に調整しているが、両脚を失している。8も丁寧な作りであるが、先端部と両脚部を失している。9は小形で深い抉りがある。完形で、長さ1.5cm、幅1.05cm、重さ0.3g。10先端部を失しているが、小形の抉りの深い剥片鎌である。黒色の良質の黒曜石を使用している。11は黒灰色の不透明な黒曜石で、バテナはやや古い。先端部を失している。厚さ7mmで、すんぐりした作りで、6に似ている。12は不純物を含む黒曜石で、先端部を失している。13も石鎌の脚の部分と思われる。良質な黒曜石を使用した剥片鎌であろう。

4・7はC-7グリッドの3層、5・6はD-12グリッドの3層からの出土である。8・12



第19図 第2地点出土石器実測図 (2)

・13は、第1次調査による出土で、8はB-2グリッドの表土層から、12はC-5グリッドの表土層からの出土で、13はA-2グリッドの2層からの出土である。9はB-10グリッドの表土層、10は、C-9グリッドの3層から、11はB-1グリッドの表土層からの出土である。

#### 石錐（第18図14・15、図版26）

14は、灰黒色のチャート製である。錐の先端部分を欠失している。残存長3.5cm、幅2.9cm、厚さ1.4cmを計る。15は14に較べると小形で、残存長2.0cm、幅1.6cm、厚さ6mmを計る。これも先端部を欠失している。濃い灰色の不透明な黒曜石製である。14、15ともに第1次調査時のもので、14はA-0グリッドの2層、15はB-2グリッドの表土層からの出土である。

#### 滑石製模造品（第18図16、図版26）

滑石製品の部分を利用して使った模造品と思われる。全体の1/3ほどを欠いているが、何らかの容器の写しでもあろうか。長軸3.8cm、残存幅2.4cm、小口面には、鋸のようなもので引き切ったような痕跡を残している。中央部の穴は深い所で1.3cm。刃物を横に動かしつつ削ったようなあとがある。底部裏面は、長軸方向に刃物で数度に分けて削っている。この底から穴の削り込み部までの高さは2.1cmある。穴の長軸方向の長さは2.5cm。第1次調査で、A-5グリッドの表土層から出土した。

#### スクレーパー（第19図1・2、図版28）

1はサスカイト。側縁部に刃を付けている。風化が進んでいる。2は珪岩の一種か。黒色不透明な部分と灰白色の部分が混じっている。両側縁部に刃を付けている。1は第1次調査で、C-3グリッドの表土層から、2はC-13グリッドの2層からの出土である。

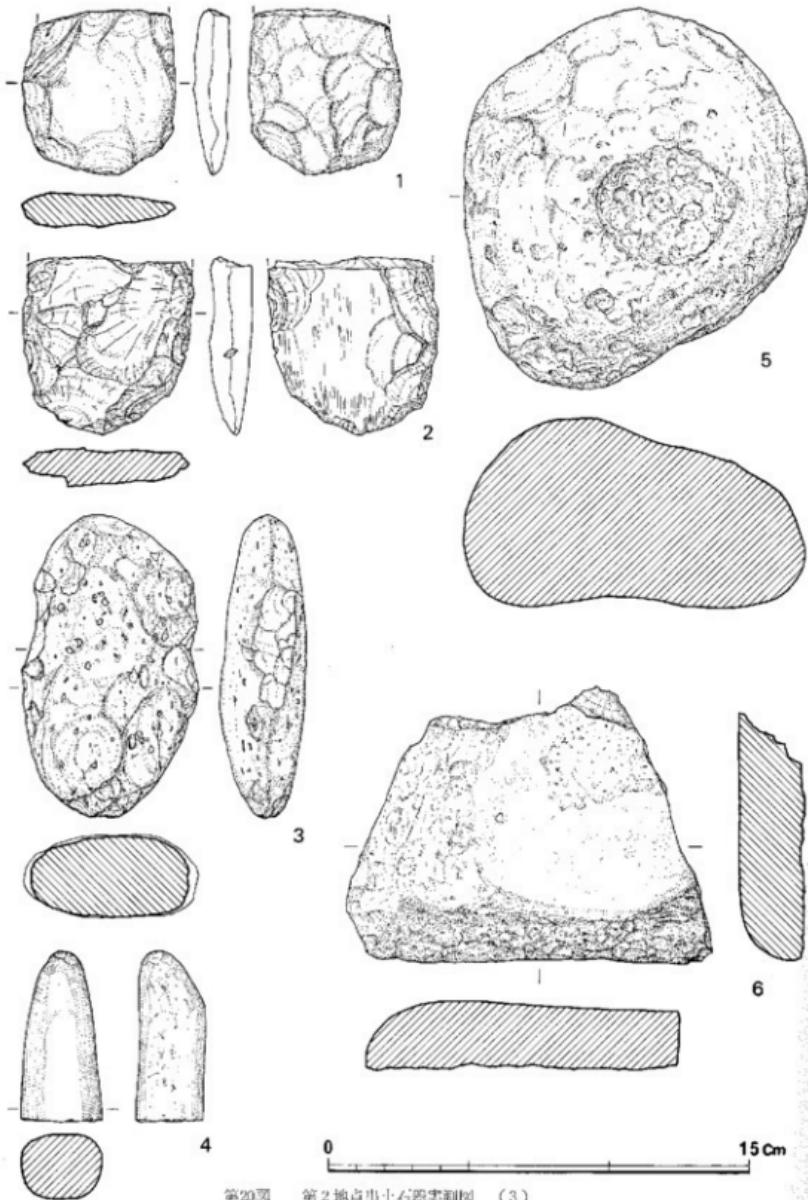
#### 剝片・使用痕のある剝片（第19図3～10、図版28・29）

3 灰色で不透明な黒曜石である。荒く加工した剝片の両側縁部に刃部を付しているが、使用によって生じたと思われる痕跡が残っている。4 頂部に自然面を残すが、良質の黒曜石である。両側縁部に使用痕を残している。5 一側縁部には自然面を残したままだが、良質の黒曜石。一側縁部に小さな使用痕が残っている。6 頂部に自然面を残しているが、これも良質な黒曜石。両側縁部に使用痕を残す。7 若干作りが雑な剝片だが、両側縁部に使用痕がある。

8 灰黒色の黒曜石で不定形な剝片である。これも両側縁部に小さな使用痕を残している。9 良質な黒曜石の剝片。両側縁部に小さな使用痕を残す。10 薄い剝片。両側縁部に使用痕を残す。3・10は第1次調査時の出土で、3はF-6グリッドの3層、10はA-2グリッドの2層からの出土。4はD-10グリッドの3層、9は表土層からの出土。5・6・7は、B-8グリッドのいずれも表土層からの出土である。8は、B-5グリッドの3層からの出土である。

#### ラウンド・スクレーパー（第19図11、図版29）

黒色の良質の黒曜石である。表面は上下及び一側方より押圧剝離で調整しているが、裏面はやや荒い剝離の面を残している。指頭大で、1.8cm×1.6cm、厚さ7.5mmある。第1次調査で、D-3グリッドの表土層から出土した。



第2圖 第2地點出土石器實測圖 (3)

### 石斧（第20図1・2、図版30）

1・2ともに打製石斧である。1は、玄武岩製で、刃部の方が残っている。両側縁部から調査している痕は残っているが、表面の風化は進んでいる。幅5.5cm。C-4グリッドの3層から出土した。2は安山岩質の石材を素材としている。これも素材を荒削りしたあと、両側縁部からこまかに調整を加えて整形している。裏面には、使用痕と思われる縦方向への擦痕があり、刃部にもこまかに欠失部分が認められる。これも上半分が折損しており全長は知り得ないが、残存部の幅は6.1cmある。第1次調査時にF-8グリッドの3層から出土した。

### 石鎌（第20図3、図版30）

輝石安山岩製で、長軸10.9cm、短軸6.4cm。抉り部の幅は5.6cmで、重さは225gである。扁平な橢円形に近い自然石を利用し、両側から浅い抉りを入れただけの簡単な作りである。第2地点での表採品で、時期的には判別しがたいが、勝町の有家町堂崎遺跡では、縄文時代晩期の遺物に伴ってかなりの量が出土している。

### 不明石器（第20図4、図版30）

黄灰色を呈する硬質の砂岩質である。長さ6.1cm、径は2.9cm×2.5cmの、隅の丸い方形に近い形で、先鋒になり、先端は丸みを持っている。表面と裏面に磨いたような痕跡が残っているが、両側縁部はおそらく自然のままである。折損しているので不明であるが、何らかの製品を作っていたものと思われる。B-11グリッドの表土層から出土した。

### 凹石（第20図5、図版30）

輝石安山岩で、長径14.0cm、短径12.3cmの不整形な橢円形で、厚さ6.7cm、重さ1.32kg。表面に一部火を受けたような痕跡がある。中央部に凹みがあるが、深さは約2mm。裏面には、特定の部分の凹みはない。C-13グリッドの、土壤状の掘り込みの中から出土した。

### 砥石（第20図6、図版30）

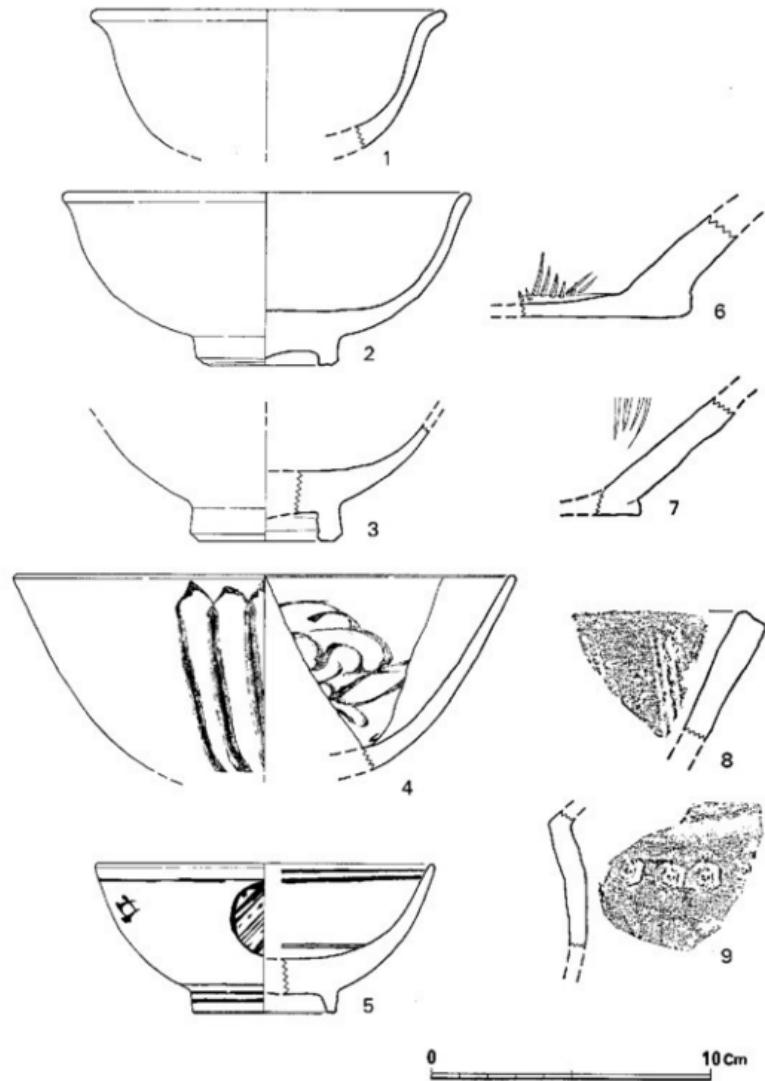
黄灰色の砂岩であるが、二辺と、裏面が欠失している。残存部は9.8cm×13.0cmで、厚さは2.5cm。上面の平坦部以外の場所には加工の痕跡がないところから、もともとは、丸みをもつた平らな自然石を砥石として使用したものと思われる。第1次調査のA-0グリッド、3層からの出土である。

### 青磁・磁器・瓦器（第21図、図版31）

#### 青磁（第21図1～4、図版31）

いずれも第2地点からの出土で、1は第1次調査、B-2グリッドの表土層から、3・4は第2次調査時のD-10、D-9グリッドの2層からの出土であり、2は表採品である。

1 小形の壺で、壺と呼ぶべきものか。復原口縁径12.7cm。器高は6cm強になるものと思われる。青味をおびた淡い草色を呈す。釉に小気泡がわずかに混じっている。口縁部で外側に折れ、先端を丸くおさめている。胎上は淡い灰色。宋時代のものと思われる。2 復原口縁径



第21図 第2地点出土器物その他の土器

14.6cm、器高6.2cm。ゆっくりと外反しつつ先端を丸くおさめた口縁を持つ。見込に、ロクロでの水引きの痕が明瞭に残っている。外面には、胴体下部までカンナによる削り痕が認められる。高台は脛の中心と少しずれて削り出されており、削り痕を荒く残している。成形・削りともにロクロは左回り。色調はやや黄味の混じった青緑色で、胎土は灰色を呈する。元時代のものと考えられる。3 色調は2に似る。見込に浅い沈線を一条めぐらしている。高台の削りはやや深く、高台内側にも一部釉がかかっている。胎土は淡い黄灰色を呈する。明時代のものと思われる。4 深鉢形の大形の壺である。口縁部から胴体下部にかけて、全体の約1/7しか残っていないが、復原口縁径18.0cm、器高は不明であるが8cm強になるものと思われる。外側に連弁を彫っているが、弁の数はかなり多く、40枚前後になりそうである。内面には牡丹の模様を配して厚く釉をかけている。色調は青味がかった緑色で、しっとりとした落着いた色をしている。胎土は1に似るが、わずかに白っぽい。明時代のものと思われる。

#### 磁器（第21図5、図版31）

波佐見焼のくらわんか茶碗である。内窓しつつにはまっすぐに伸びた口縁部の先端を丸くおさめている。口縁内側に2本、見込に2本の線を描いている。外側には、口縁部に1本、高台脇に1本、高台に2本の線を描いている。胴部には、組合せた松葉と窓絵を描いている。以上の線と絵は粗呂須で描かれ、青灰色を呈する。見込の釉を蛇の目にはいで砂を散き、重ね焼きにしており、高台下にも砂が付着している。復原口縁径12.2cm、器高5.4cm。胎土は淡い灰色を呈する。江戸時代中期から後期にかけてのものと思われる。第2地点での表採品である。

（青磁・磁器については、長崎県立美術博物館の馬場独氏の御教示を得た。）

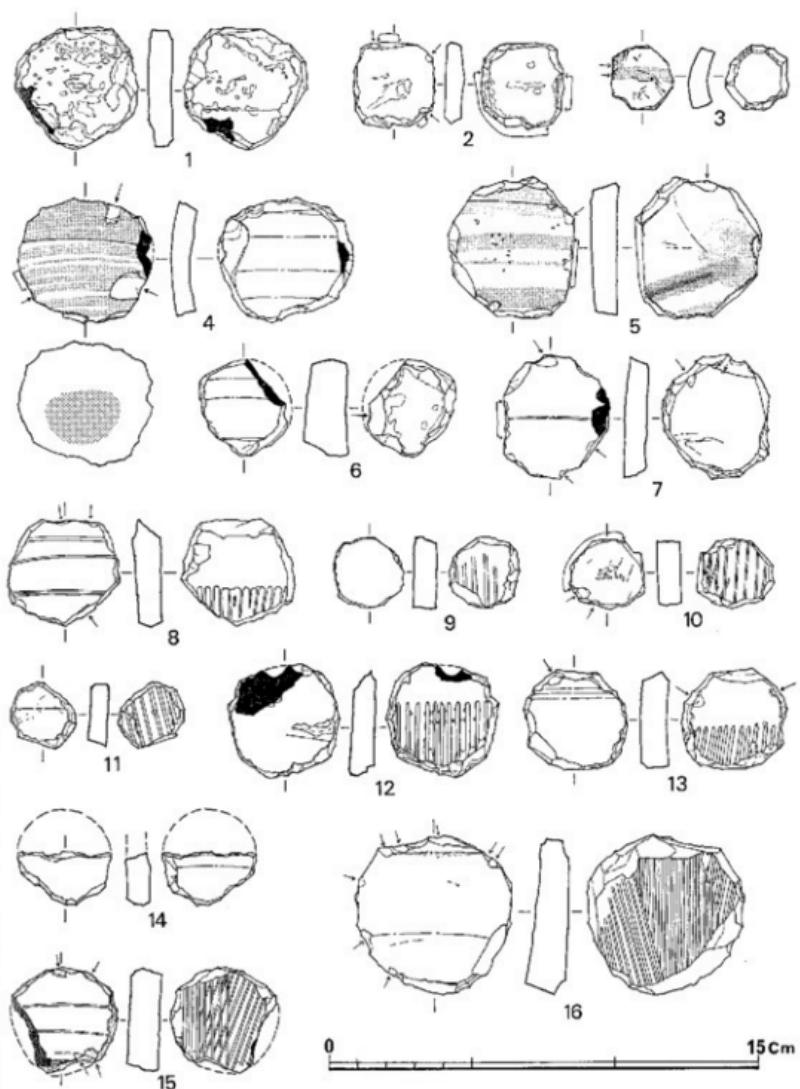
#### 瓦器（第21図6～9、図版31）

6～8ともに掃鉢と思われる。6・7は平底の底部、8は口縁部であるが、いずれも小破片で法量を知り得ない。6は、外面は赤褐色を呈し、内面には底部まで櫛目を付けている。7は茶褐色を呈し、内面に櫛目がある。外側はナデで仕上げている。8 口縁部で、端部を平らに仕上げている。内面に3本以上の櫛目が残る。6～8ともに胎土に石英粒を含んでいる。9は、いわゆる焙烙質のもので、火鉢として使用したものか。外側は丁寧に磨いたあと、三重の六角形のスタンプを押し付けている。一部にススの付着が認められる。6はB-6グリッドの表土層、7はD-13グリッドの2層からの出土である。8はB-11グリッドの表土層から、9はD-9グリッドの2層からの出土である。

### (3) 円盤状陶磁製品（第22図、図版32～34、第1表）

風呂川遺跡では16個の当製品の出土があった。その個々のものを説明し、若干の問題点を整理したい。なお南磁器の器種・窯・年代などについて、全面的に馬場強氏の御指導・御教示をいただいた。明記し感謝の意を表したい。説明の不備があれば筆者の誤謬である。

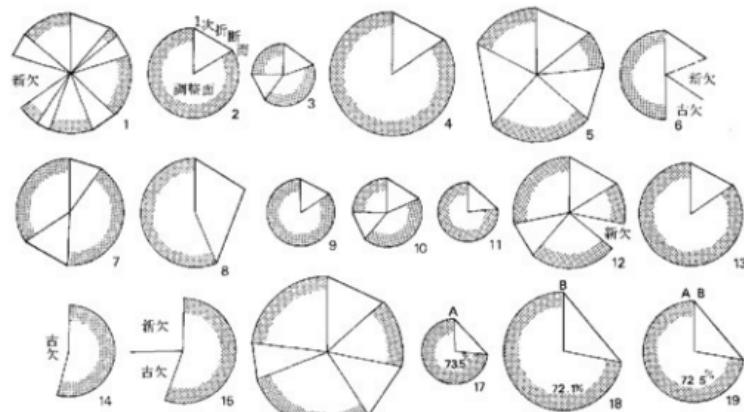
- 1 猶恵系破片を利用。表裏はヨコナデ調整し薄手のつくり。鉢体部片か。外は黒灰色釉が薄くかかり、内は灰色を呈する。胎土は石英砂を含みザクザクした感じ。周縁部の加工は削離というよりも角をつぶしたような粗い調査。裏材の破片時の折面（1次折断面とする）が周縁側辺に5箇所認められる（第23図）。表裏とも斑点状に釉が剥落している。一部新しい欠損（第22図黒塗り部分）がみられる。中世期か。試掘G-13bグリッド1層出土。
- 2 猶恵櫻系の削離片利用。薄手のつくりで、器肉は灰色から淡赤茶色を呈し、表裏に明茶灰色の釉が薄くかかる。周縁の調整は細かく、一次折断面は上端に1箇所認められる。表裏とも中央部の釉が剥落し、裏面は周縁まで剥落している。表は周縁が数箇所ウロコ状に小さく剥落している（第22図矢印）。第2地点C-9グリッド1層出土。
- 3 古伊万里の本原窯系染付茶碗の体下半片利用。中央に染付による太めの圓線がはいる。一次折断面は2箇所が対にあり、調査は周縁の66.5%に及ぶ。周縁の加工はわりと大きく、八角形状をなす。表は斑点状に小さなキズと線状痕がはいり、周縁は小さくウロコ状に剥落している。表裏とも鋸の角は細かくつぶれている。江戸中・後期。第1地点A-1グリッド1層出土。
- 4 武雄北系黒牟田窯油徳利体部片利用。茶褐色を呈し、表は淡黄茶色の刷毛目化粧を施し、細かい気泡を含んだガラス質の透明釉がかかる。焼成堅致で、調査の削離面は鋭い。一次折断面は1箇所ある。表には細かい線状痕が無数に不定方向を指してはいっており、図の点アミ部分は釉表面の磨滅が認められる部分で、置いた場合高いか一番下になる部分にあたっている。表にはウロコ状剥落や細かい剥落が数箇所認められる。第1地点A-1グリッド1層出土。
- 5 武雄南系弓野窯の二彩唐津捏鉢体部片利用。表は暗褐色の地に白い刷毛目を施し、内は白化粧のうえに直線的な2本の鉄鉱と丸く網で線に描かれている。器肉は赤褐色を呈する。一次折断面は3箇所あり、調整は全周の51.1%で半分ほどにすぎない。表は中央付近の釉が細かく斑点状に剥落し、周縁はウロコ状に数箇所剥落している。裏は中央部に擦痕と線状痕が認められる。江戸後期。第2地点C-8グリッド1層出土。
- 6 武雄南系弓野窯の捏鉢体下半片利用。器肉は淡赤茶色を呈し、表は暗褐色の釉が薄くかかり、内は白化粧されている。一次折断面は1箇所あり、新しい欠損と古い欠損が認められる。側縁は全体に磨滅しており、使用によるものではなく、あとでローリングを著しくうけたためか。江戸後期。第2地点C-8グリッド1層出土。
- 7 武雄北系多々郎窯の飯沼窯体部片利用。茶灰色を呈し、器肉は赤茶色でしまが数条はい



第22圖 凸點狀四磁品実測図 (1/4)

第1表 円整状陶磁製品一覧表 ※器種・窯・年代については馬場益氏の鑑定・指導をうけた

No.	地 区	器 種	式 × 高	平均値	幅さ cm	重量 g	調査 年	次総 %	正 月 張	器種・部位	期・年代
1	近 畿 G13b	1	4.44×4.36	4.4	0.93	21.8	65.6	15.4	美濃近江灰に種別無 直口片	直口片	中世?
2	2C8	1	3.32×3.2	3.26	0.62	7.4	83.9		中央と四縁の斜削落 直口に小さな斜落	直口片	
3	1A1	1	2.33×2.2	2.27	0.71	4.7	96.3		鉢身に斜削落、斜收 直口に小さな斜落	吉伊万形足付茶碗	木津瀬名
4	1A1	1	4.80×4.37	4.49	0.7	21.9	84.9		武藏灰直口灰、中央斜削落 直口にこまかい斜落	直口片	武藏北名古ノ代高
5	2C8	1	5.1×4.7	4.9	0.9	29.9	51.1		直身に小さく延びる斜削落、直口灰 直口に小さな斜落	直口片	武藏北名古ノ代高
6	2C8	1	3.32×3.63±0	3.52	15.6±0	10.2±0	30.5 (約14.7) (約15.6)		直口は全体に肥溝 直口に斜削落	直口片	武藏北名古野空系 直口片
7	1C1	1	4.3×3.56	3.93	0.84	19.8	76.0		直口にこまかい斜落	直口片	武藏北名古ノ代高
8	1B3	3	4.2×3.7	3.95	1.04	17.8	60.4		直口に小さな斜落	直口片	江戸時代
9	1B2	1	2.36×2.47	2.32	0.78	6.1	84.4		直口にこまかい斜落	直口片	
10	1B2	1	2.7×2.49	2.6	0.81	7.5	66.7		直身に斜削落、斜收落 直口に小さな斜落	直口片	
11	2C4	3	2.36×2.06	2.21	0.62	4.4	76.4		直口にこまかい斜削落 直口に直点灰斜落	直口片	
12	2B5	1	4.16×4.0	4.08	0.86	16.5±0	73.3 (~23.5)	7.4	直口に直点灰斜落	直口片	
13	2C8	1	3.83×3.54	3.69	0.95	16.4±0	85.4		直口に小さな斜落	直口片	
14	2C4	3	3.34		0.82	5.9±0	53.9±0	46.1		直口片	
15	2B9	1	3.6×3.76±0		1.08	17.8±0	55.3 (約19.2) (約23.5)	44.7	直口はこまかい斜落	直口片	明治以前
16	1B2	1	5.3×5.4	5.43	1.4	47.5	66.1		直口に複数 直口の一部が肥溝・小さな斜落	直口片	
									直口に斜削落	直口片	



第23図 周縁の調整加工・断面図

る。紐づくりでタタキ手法のあとすり消している。堅く焼きしめられ、調整の剝離は鈍くシャープな感がする。一次折断面は2箇所が対してあり、調整は76%に及ぶ。表裏側縁には細かいウロコ状の剥落がみられる。第1地点C-1グリッド1層出土。

8 撥鉢体上部片利用。表裏はやや紫色味おびた暗褐色の釉がかかり、器内は淡赤茶色を呈する。内面の筋口はわりと太目。折断面は2箇所がつながり一角をなし、調整が大雑ばなため、形状は五角形に近い。周縁にはこまかい剥落。江戸時代。第1地点B-3グリッド3層。

9 撥鉢体部片利用。表裏は光沢をもつ暗褐色の釉がかかる。アバタ状に小穴がたくさんみられるが、これは播鉢として製作された段階にはすでにその状態であったと思われる。内の筋目は釉で埋まりあまり明瞭でない。周縁は全体に細かく剥落しているが、とくに表にその状況が著しい。江戸時代。第1地点B-2グリッド1層出土。

10 撥鉢体部片利用。表裏の釉は淡黒褐色で、器内は赤茶色を呈する。折断面は2箇所あり、調整は66.7%に及ぶ。全体の形状は稍円形にちかい。表中央部に擦痕状の小さなキズと線状痕がけはいり、周縁は細かく剥落している。江戸時代。第1地点B-2グリッド1層出土。

11 撥鉢体部片利用。表裏の釉はチョコレート色(暗褐色)で、器内は淡赤茶色を呈する。胎土は細かい石英粒がけはいりややザクザクした感がある。折断面は1箇所、調整は76.4%に及ぶ。全体の形状は稍円形にちかい。表に細かい線状痕が認められる。江戸時代。第2地点C-4グリッド3層出土。

12 撥鉢体部片利用。表裏の釉は光沢をもつ暗茶褐色をなし、器内はハグ色気味の明赤茶色を呈する。胎土は細かい石英粒を含みザクザクした感がある。1次折断面は2箇所認められる。上端には新しい欠損がある。江戸時代。第2地点B-5グリッド1層出土。

13 撥鉢体部片利用。表裏の釉は光沢をもつチョコレート色をなす。器内は淡赤茶色を呈し、細かい石英粒を含んでいる。1次折断面は1箇所。周縁は紅かいウロコ状剥落が認められる。江戸時代。第2地点C-8グリッド1層出土。

14 撥鉢? 体部片利用か。暗褐色釉で、器内は淡赤茶色を呈する。表は二次的火熱をうけたためかアバタ状に小穴が無数にみられ、すすぐた状態である。使用時の欠失か半折している。第2地点C-4グリッド3層出土。

15 撥鉢体部片利用。暗褐色の釉が薄くかかり、器内は赤茶色を呈する。45%ほどを欠失しているが、その半分は新しい欠損と古い欠損の両者に区別が可能である。表に3箇所ほどの小さなウロコ状剥落が認められる。明治時代以降。第2地点B-9グリッド1層出土。

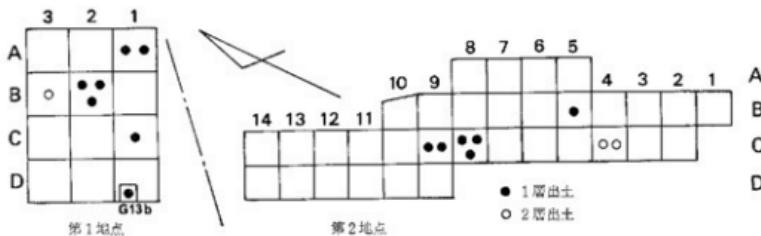
16 撥鉢体下半部片利用。表裏にやや緑色味もつ暗茶褐色の釉がかかり、器内は淡赤茶色を呈し1mm以下の小石英粒を含みややザクザクした感がある。内の筋目は細くわりと整い重複している。一次折断面は3箇所あり、調整はわりと大雑ば。裏面上端の側縁剝離面が部分的にややつぶれている。表周縁はウロコ状に剥落し、上端は甘い核線にそって擦痕が認められる。明治時代以降。第1地点B-2グリッド1層出土。

以上16個の当製品について述べた。円盤状製品については、昭和56年9月6日第3回長崎考古学研究会で南高来郡北有馬町今福遺跡の資料（119点）をもとに研究発表をおこなった。当時発掘調査中であったため中間報告としたが、現在調査は終了し整理中である。整理が進んだ段階に総括的な問題をとりあげ再報告をしたいと考えている。したがってここでは若干の問題点の指摘にとどめたいと思う。

#### 出土状況（第24図）

当製品は遺構内からの出土ではなく、1層から13点、3層から3点出土している。1層は表土（耕作土）で、3層も後世の擾乱のため整層でなく時代的な決めてではない。

出土分布は、第1地点8点、第2地点8点出土し、1地点ではB2区を中心に分布、2地点では2箇所にまとまったような出土状況を示している。このような状況は、当製品が使用において、単独でなく数個のまとまった使い方が考えられよう。



第24図 円盤状陶磁製品出土分布図

#### 時代・時期

16点は、須恵器系中世期2点、江戸中後期9点、明治以降2点、不明（江戸・明治以降）3点という内訳になる。しかし問題は、当製品が二次的に破片を利用するという性格上、容器としての時代・時期と当製品の製作・使用時期とがかけはなれることも考えられる点である。風呂川遺跡では出土状況において正確な時期をおさえることは難しい。

#### 素材と使用部位

素材は全て陶磁製品の破片を利用し、須恵器系2点、磁器1点、陶器13点となる。磁器は茶碗片、陶器では擂鉢9点、粗鉢2点、飯胸甕1点、油徳利1点で、擂鉢片利用が多いのが特徴（註1）である。使用部位では全て全体部片を利用し、今福遺跡でみられる口辺部・底部利用のものはない。

#### 製作方法と形状（第24・25図）

製作方法は、適当な破片の周縁を打ち欠き製品とするものである。加工方法については、今福遺跡の調査中発掘作業に参加していた歴人の方々からその製作法について聽いたが、美術博

物館の馬場強氏からも御教示をいただいた。石の上にかけらを落す、手に握った石の先で角をとっていくように周縁を上から打ち欠くやり方である。したがって周縁は直角に近い削離面を形成し、斜めに打刻し刃部をつくりだすものではない。

素材の大きさは、一次折断面が相対したり数箇所にも認められるところから、製作時における素材の大きさは製品と極端に違ひがあるものでないことがわかる（第23図）。また周縁の調整は72.5%にすぎず、かならずしも全周にわたって行なう必要がなかったことが考えられる。

形状は円形を基調とするが、楕円形や隅丸方形、多角形状にちかいものもある。しかし、その形状に仕上げようとしたものではなく、粗いつくりのものや、技術の稚拙さによるものと考える。したがって使用に際しても、形状的には略円形であればさしつかえなかつたのである。製品の長径と短径の関係（第25図）も、1:1.5間に全て包括されることから、形状的に長短の差が少ない略円形状を基本としたことがわかる。

#### 使用痕と破損状況（第25図・第2表）

破損しているものは7点あり、6点は新しい欠失が認められる。古い欠損と考えられるものは3点（第25図6・14・15）あり、6は約1/6、14は約1/2弱、15は約1/5を欠失している。16点のうち3点で19%程を占め、使用において欠損する度合がわりと高く、ある程度激しい用途が予想される。

使用痕については細かい観察を行なった。その結果16点のうち15点に何らかの使用にもとづいたと思われるキズが認められる。小さなキズが観察できない第22図14は使用によって半折しておらず、全てになんらかのキズ痕が認められたことになる。

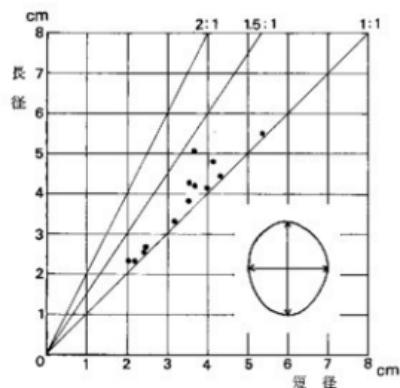
細かい使用痕についてA～Fに分類してみた（第2表）。

第2表. 使用痕観察表

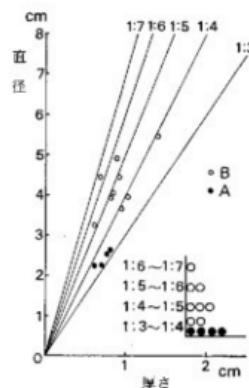
表裏		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
A	表	○	○			○											
	裏	○	○				○?					○?					
B	表			○	○						○					○	
	裏			○		○											
C	表				○						○	○					
	裏					○											
D	表			○	○	○		○	○				○	○	○		
	裏				○		○					○					
E	表			○	○				○	○	○						
	裏			○				○	○	○							
F						○										○	

A 中央および周縁が遺点状に剥落

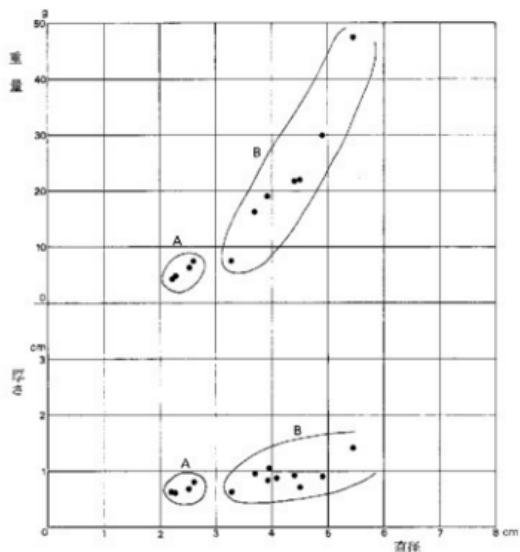
B 細が擦痕状に磨滅



第25図 長径と短径の関係図



第26図 直径と厚さの関係図



第27図 直径と重量・厚さの関係図

- C 軸に細かい線状痕がはいる
- D 周縁がウロコ状に剥落
- E 周縁が細かく剥落
- F 側縁が磨滅

使用痕のはいる部位は、周縁部にA・D・E、中央部にB、器表全面にCがはいる。Aは釉が薄い場合に顕著で、B・Cはガラス質の軸の場合に著しいようだ。

Aは表3件、裏2件、不明2件。Bは表4件、裏2件。Cは表3件、裏1件。Dは表8件、裏3件。Eは表5件、裏3件。Fが2件となる。総計すると表23件、裏11件となり、表側が倍以上の比率をもっている。表側の使用痕が著しいことの原因の一つは、表側にふくらみを有する場合が多いことにもよるが、使われ方にも要因があるのかもしれない。器種的には擂鉢が、表11件・裏3件と特に表側に顕著で、内の筋目を避けた使用を想定できる。  
(註2)

これらは全て使用時にはいったものとは断言できないが、傾向としてはとらえられるのではないかと思う。Fについては、ローリングなどの自然骨力による可能性が強いことが考えられる。

#### 大きさ・重量（第26・27図）

直径（長径と短径の平均値）と重量および厚さとの関係をグラフにしたのが第26図である。この法量グラフによって、AとBの2種に区分が可能である。

A類（3・9・10・11）の4点で、法量の平均値は、径2.4cm、厚さ0.73cm、重さ5.7gを測る。

B類は他12点で、法量の平均値は、径4.24cm、厚さ0.97cm、重さ22.7gを測る。

直径と厚さとの対比を示したのが第26図である。A類は厚さと径の比が1:3と1:4の間に含まれるが、B類は1:3~1:7の間に包括されている。

今福遺跡の資料では、このA類はB類の範囲に含まれるように考えたが、このデータによって再考を要するようになった。さらに径7cm以上のC類としたもの、厚さと径との比がほぼ1:1~1:2の間に包括されるD類としたもの、A類より小さなグループ（今福遺跡のA類）なども風呂川遺跡では欠落している。

#### 用途について

当製品類は今福遺跡調査中に気づき興味をもっていたが、とくに注目しはじめたのは、昭和55年12月第3回九州地区旧石器文化研究会の懇親会の席で、北九州市教育文化事業団の上村佳典氏から話をうかがってからである。上村氏は陶刀としての使用法を推定しておられたが、筆者はその疑問から出発した。

今福遺跡調査中に、在地の作業員の方々に当製品を示して質問したところ、カメのかけらで石けりにつかっただという人が数人おり、その製作法・使用法などを聽いた。56年8月には作業員の方々（男1人女32人）にアンケートをおこない、当地方の子供のころの遊びを収集した。

それによれば、石ケリの玉には、平べったい石、円くあるいは四角くした瓦、カメやチャワンのかけらを円くしたものや四角いかけらを用いる。他に瓦タオシ・瓦アテというゲームでは、瓦・石・おてだまの他にカメのかけらを使ったという人もいる。おはじきについても、小石、ネコ貝（キサゴ貝）、ガラス製品の他に、チャワンのかけらをけずってつくり、あるいは小さいかけらをそのまま使ったという人もいた。

以上のアンケート結果によって、小形のものはおはじきに、大形のものは石ケリに使用されていたことがわかった。風呂川遺跡出土資料から観察された使用痕のあり方も、指ではじいたり、投げたり、足先で蹴ったりする遊びの動きに相応した状況を示しているように思える。当製品はあくまでも破片を利用する二義的な存在であり、一義的な牛座具とするよりも一種の遊戯具と考えるのもこの点にある。

### まとめ

円盤状製品は近世陶磁器利用のものに限らず、绳文土器、弥生土器、土師・須恵器、中世陶磁器利用のものがあり、円盤状土製品類としてとらえることができる。さらに瓦製・石製のものもあり、一括して円盤状製品として把握が可能である。考古学研究会の発表では法量的に連続性をとらえ、そこに縄文時代から近世まで脈々と続く、遊戯具としての性格を想定した。

用途の項で「石ケリ」というゲームがなされていてそれを指摘したが、このゲームは児童遊戯関係の文献では、明治の文明開化のころにヨーロッパから移入され、当初は教育遊戯としての要素が強かったが、やがて子供

たちに広く流行したと評価している。

第28図に当製品類と関係が深いと考えられる遊びおよび遊び具の系統を概略した。

もっとも基本的で長い歴史をもつ遊びとして、木の実打ちから、鐵打ち、泥面子、ビーベー、紙面子につながる「穴一」系統のゲームがある。

くるみ・ぎんなん・むくろじゅの木の実を打つという原始的なゲームが、平安時代には鐵におきかえられ、鐵打ちは江戸時代には全盛をきわめる。幕末から明治にかけては、土製の鉢形（泥面子・紋



打面), ゼゼ貝(キサゴ貝)などが鏡の代用として愛用され、「六道」・「きず」のゲームが盛んだった。明治12・13年頃には紙面子があらわれ、メンコをたたきつけ裏返しにしたらもらえる「起こし」「面返し」のゲームがあらわれたが、明治33年鉛毒事件がおこり、それをきっかけとして製造中止となる。明治30年代にはそれにとてかわって紙面子が流行し現在にいたったとしている。

この面子系統あるいは鏡打ち系統の他に「穴一」のもう一つの系統に玉系統でもいいべきものがある。

これは木の実打ちから直接的につながる系統で、明治初頃(?)に泥玉が製造され、明治30年代に売りだされたラムネ玉のあと、ガラス屑をもとにしてビー玉が生産されるようになり盛んに遊ばれたものである。

考古学話会の発表では、風呂川遺跡のA類より小さなグループをおはじき類としてとらえた。碁石を用いるものは奈良時代には存在し、陶上製を利用したものは現在管見する限りでは室町前期以前には存在した可能性をもっている。このおはじき系統も原初的で、普遍的なものと考えられるところから、かなり遡る可能性をもっている。

風呂川遺跡のA・B類は、発表時にはB類と一括しメンコ類としてとらえた。ある程度幅があることはわかっていたが、遊びの種類よりも年令的な幅とも考えられるところから、縄文時代から続くもっとも基本的なグループとしてとらえていた。風呂川遺跡でA・B類に区分できたため、もう一度細分の意味について考えてみたい。

他にC~F類まで設定し、C・Fを大型メンコ類、Dを玉類としてグルーピングしたが、今回は詳述はさけ、今後遺跡資料の整理が進んだ段階に再び当製品類をとりあげ問題を深化したいと考えている。

以上によって、円盤状製品類は小型のものがおはじき系統に使用され、大型のものは文明開化以前には「穴一」系統のゲームに用いられていたが、石ケリの普及とともに代用・転用されたのではないかと想定している。

最後に現在管見にふれる県内の出土品をあげるが、他県の資料についても御指導いただければ幸いである。

(註5)

①長崎市深堀遺跡(縄文前期)

(註6)

②北松浦郡田平町里出原遺跡(弥生・奈良)

(註7)

③南高来郡北有馬町今福遺跡(弥生・中世・近世)

(註8)

④南高来郡北有馬町三尺町(近世)

(註9)

⑤南高来郡西有家町風呂川遺跡(須恵・近世)

(註10)

⑥南高来郡有家町堂崎遺跡(近世)

(註11)

⑦島原市杉谷立野(近世)

(註12)

⑧大村市池田郷嶽ノ下B(近世)

(註13)  
⑨長崎市茂木玉台寺新田遺跡（石製品）（近世）

現在9箇所とまだ出土地は少ないが、素材としてふんだんにある破片を利用し、製作にも特殊な技術はいらない一般的な遊戲具であるため、注意していけば今後出土例はかなり増えていくと思われる。

- 註1 描跡は多目的に使われ使用頻度が高かったと馬場強氏から御教示をいただいた。したがって素材としての就用も多かっただろう。
- 2 石ケリでの使用の際、透鉢片利用のものは筋目がある方がすべりが悪いため、表を下になるよう投げていたと馬場強氏から御教示をいただいた。
- 3 長崎市茂木では、石製凹型を使っておでだまのような遊び方があったことを、長崎市教育委員会永松氏から御教示をいただいた。石製凹盤は同教育委員会で保管している。
- 4 中田幸平1970『日本の児童遊戯』社会思想社  
清水曉・管原道彦・土岐耕男1976『ふるさとあそびの事典』東陽出版などの文献。  
しかし最近入手した次の文献では石ケリのことを「しけし・きしきし」と江戸時代にいったとしている。この点についてはもう一度調べてみたい。  
木口堅三1982『子供の遊びと憑口集』『民俗事典風俗文化編』長崎文庫社
- 5 曾根式土器片利用。長崎市教育委員会永松氏・渡辺東行氏御教示。
- 6 弥生中期土器片利用。軟質の須恵器片利用。原文化課保管。
- 7 昭和52年度～56年度調査。現在整理中。
- 8 今福遺跡調査に参加していただいた高橋キタヤ氏採集。
- 9 出土状況では判断ができないが、須恵器利用のものは中世期の可能性が考えられる。
- 10 昭和55・56年度調査。56年度報告書刊行。
- 11 昭和56年筆者採集。
- 12 昭和55年度調査。整理中。塙田和裕氏御教示。
- 13 註3と同じ。

追記：原稿を書きあげた後に馬場強氏から次の文献を紹介していただいた。全5巻の児童遊戲研究の大著で圧倒される。それによれば、考証的見地から時代的判定は難しいが、明治以前からの伝承遊びと考えたいとしている。

半沢敏郎 1980『童遊文化史』4巻1・別巻1 東京吉野

馬場氏には、陶磁関係のみならず広く御指導をいただいた。感謝したい。

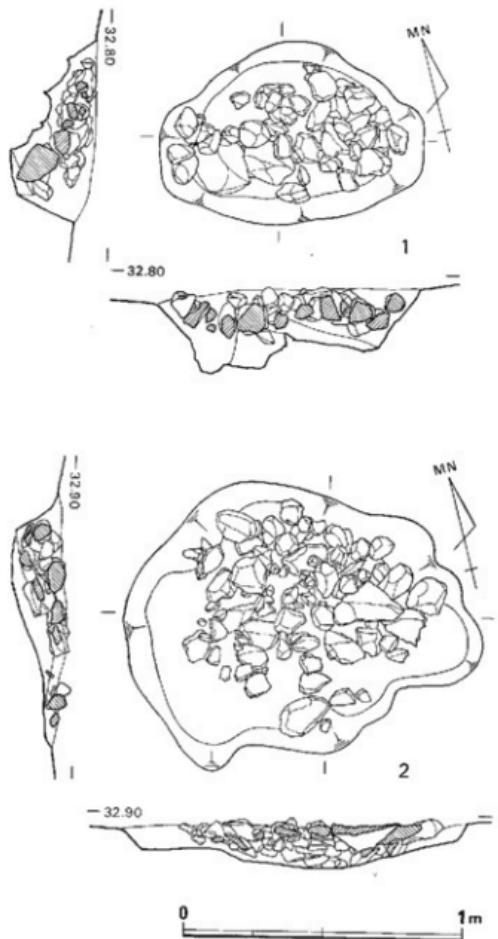
出土地として、対馬シタル貝塚例（2点）を追加したい。

⑩上総町仁田シタル貝塚（縄文後期）

水野清一・樋口隆康・岡崎敬1953『対馬』東亞考古学会

## 5. 遺構

遺構は第2地点で検出したのみで、第1地点では人為的な遺構は認められなかった。第1次調査の際のA-2グリッドからは、岩盤を掘り込んだ深さ約1.7mに達する穴が検出され、さらにA-3グリッドでは土壌状の掘り込みが認められていたが、これらはいずれも第2次調査を待って埋め戻しておいた。第2次調査では、以上のほかに新たにB-8グリッドから2基の集石遺構が検出された。



第29図 1号集石 2号集石遺構実測図

### (1) 集石遺構 (第29図)

図版35・36・37)

1号集石 主軸をN-75°-Wに向けている。長軸95cm、短軸65cmの楕円形の掘り込みの中に、拳大から、わずかではあるが人頭大の石をつめている。掘り込みは南側に深く、また、四側も深く岩盤に達するまで掘り下げている。掘り込み面からの深さは、東側で約20cm、西側で30cmである。

2号集石 主軸はN-72°-Wである。長軸130cm、短軸104cmの、南側が乱れた不整形の土壤を持つ。掘り込みは浅く、掘り込み面からの深さは約20cmである。ここにも拳大の石をつめているが、1号集石ほどの集合は感じられない。板状に割れた石が1号よりも多い。

1号・2号集石とともに、特

別な石を持ち込んだ形跡はなく、全て近辺に見られる輝石安山岩を集めたものである。集石を入れた土壇の周壁・床面ともに火を受けた痕跡は認め難かった。いずれも遺構中には何らの遺物も認められず、時期の判断はできなかったが、近年、長崎県諫早市において、中核工業団地造成に伴う調査に際して類似のものが出土している。そこでの集石遺構は縄文時代早期から前期初頭にかけてのものと推測されているが、風呂川遺跡の集石遺構の近辺からも時期的に同じような遺物が出土しており、断定はできないが、時間的には近いものと思われる。

## (2) 不明堅穴遺構（第30図 図版38・39）

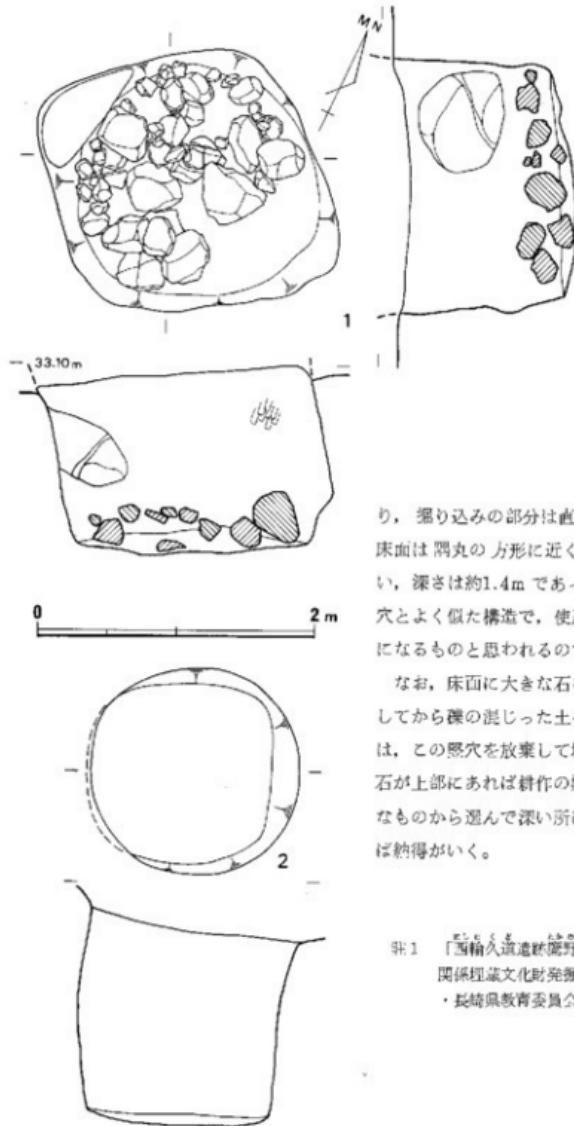
第1次調査の際、A-2グリッドの北西隅に検出した堅穴で、不明土壇と呼んでいたものである。第2次調査で規模・時期等を確認するため、一部分を掘ったのみで埋め戻しておいた。

堅穴の掘り込み面での大きさは、長軸2.4m、短軸2mで、角のとれた菱形に近い形をしており、床面は1.6m×1.7mほどの不整形な円に近い。掘り込み面からの深さは1.4mで、埋め土と傾斜との境は明瞭に識別できる。堅穴の北側の塗面には、幅5～7cmほどの鉄様のもので掘った痕跡が、右斜上方から左下方に向いて残っている。床面は、やわらかな風化岩盤をほぼ平らに削っている。この岩盤は、茶色・黒褐色・黄色等の色が混じっているが、全体的には淡黄褐色を呈している。床面にある石は、ひと抱え以上もあるものから人頭人のもので、これら大形の石の間には拳大の石も混じっている。この大小の石は、ほとんどが円礫で、割ったり、加工を施されたものなどは全く見られず、また、よそから運んだと思われる石もなく、全てが近辺にあるものばかりであった。大小の石の間には、空間の残った所も多く、石と石の間の土も固まっている。

この堅穴に埋められた土については、土層の項に詳述したとおりで、ここで多くは述べないが、調査の結果では、大きな石を入れ、その後、短時間の間に礫混じりの土を入れるという、順序ある人為的な埋め方をしたものであり、また、その行為がなされてから現在までに、さほどどの時間的経過がないことが判明した。製作の時期はさほど古いものでないことはわかったが、発掘作業に従事した人や、近所の人達の話からしても、この堅穴に関しての記憶は見い出せず、数十年以上はたっていることが知られたことにとどまる。遺物が全く無かったため、この堅穴の製作された時期、あるいは埋められた時期については、以上の推測の域を出なかった。

この堅穴の使途についての証拠は全く無いが、物の貯蔵を目的としていたであろうことは、調査に従事した者の一致した意見である。さらに、この場合の「もの」は、さつまいものであることもほぼ一致しており、妥当であると考えられる。

昭和56年12月、県文化課で、遺跡局知事案の一環として分布調査を実施した際に、飯盛町内に於てこの堅穴に似た穴を見たので、その略図を第30図2として付しておいた。分布調査に同行された飯盛町教育委員会の方の話によれば、これは「いもがま」で収穫後のさつまいもを一冬越せるために用い、現在も使用することであった。山裾の崖ぎわに掘り込まれてお



り、掘り込みの部分は直径約1.5mの円形で、床面は円丸の方形に近く、 $1.3\text{m} \times 1.3\text{m}$  くらい、深さは約1.4mであった。風呂川遺跡の竪穴とよく似た構造で、用途を考えるうえで参考になるものと思われる所以記した。

なお、床面に大きな石を置いて、あるいは落してから裸の混じった土を入れたことについては、この窓穴を放棄して埋め戻す時に、大きな石が上部にあれば耕作の妨げになるため、大きなものから選んで深い所に入れたものと考えれば納得がいく。

図1 「西輪久遺跡窓穴遺跡」諫早中核工芸町地  
開発埋蔵文化財発掘調査 地域振興整備公团  
・長崎県教育委員会 1981

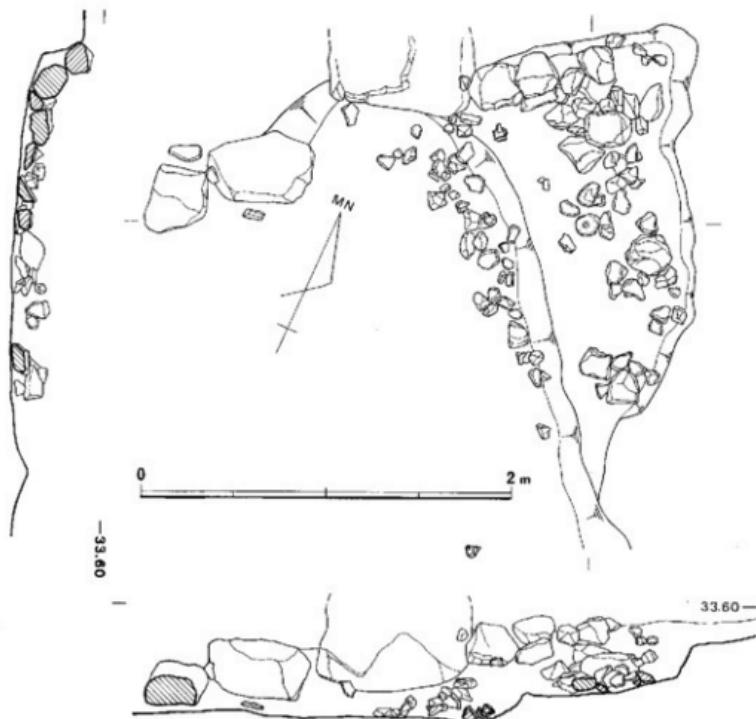
第30図 不明窓穴道構実測図

### (3) 配石遺構 (第31図 図版40)

第1次調査時にA-3グリッドで検出した上層状のものは、第2次調査のC-13グリッド中に含まれることになり、周辺を含めて全面を調査した結果、地山に迷する掘り込みのある配石遺構とも呼ばれるものであることが判明した。

掘り込みは第2層からなされており、この部分の土層は第2層の暗褐色泥炭層に似た色をしているが、粘質の度合が強い。東側からは二段に掘り込んでおり、最初の掘り込みは20cm程度であり、東側での辺の長さは2.5mを測る。次の二段目も20cm弱の掘り込みがあり、北側では一段目の掘り込みの下端から1.1mの距離があり、南側では接して一段になっている。

北側には、幅80cmほどもある大きな自然石がある。この石の上部は、耕作の妨げになるためと思われるが、打ち欠かれている。もともとからの地山の石であり、この石の東側に接して、



第31図 配石遺構実測図

一抱えもある石を二段に築いたような状況が見られた。これは東西方向に約85cmほど速らなり、一段目の掘り込みの北壁部をなしている感がある。

一段目と二段目の間のやや平らな部分には、大きなもので25cm角ほどの石、小さなもので半分の石が散乱した状況で残っていたが、これは、目的を持って並べたとか、敷いたという人為的なもののようには見受けられなかった。これらの石の間から、第20図5に示した圓石が出上した。圓石も、礎の間にまぎれ込んだような状況での出土である。

二段目の掘り込みは、北西から南東の方向に走っており、北西端は先に述べた大石に達して終っており、南東は大石から2m強の場所で一段目の掘り込みと合って60cmほどそのまま伸び、その後西方に流れて終っている。掘り込みの下端部はいくぶんくぼみ、わずかではあるが、溝の底状に見える場所もある。この部分に沿って、人頭大から拳大の石が出上したが、これも並べたとか敷いたという状況は認められず、單にくぼ地に寄せたというほどの感じを受けた。

この遺構に伴う石材は、全て近辺に産する輝石安山岩の円礎であり、他からの持ち込みと思われる異種の石材は認められない。また、角のとれた円礎がほとんどで、加工されたような石は全くなかった。

この遺構から出土した遺物は、先述した圓石のほかに、尖端の付いた瓦器、横鉢片、滑石製の石鏡の破片などがある。遺構に密着した状態での出土ではなく、掘り込まれた土の中からの出土であった。これらの遺物から考えると、この遺構の時期は、大きな幅はあるが、中世以降のものであろうと考えられる。

遺構の性格は判然としないが、一番北の隅から南西方向に伸びる線と、わずかなくぼみを持つ溝の底状の、南東方向へ伸びる線を認めることができる。前者は、その東側で大きな自然石に接して石壠状の施設を持つが、西側は單なる掘り込みで終っている。地形から見た傾きは東側が高く、西方になるにつれ低くなっているので、高い部分のみに石を築いたものと考えられる。この線にはほぼ直角に近く、南東に伸びる線があるが、特別な施設もなく、意図するところは不明である。感じとしては石垣などの一番底のようにも思われるが、石垣として使った石材は見られない。

以上の状況から考えると、以前、この部分に区切りを持つ畠地があったものであろうかと思われる。その畠の境として、石垣などを設け、あるいは溝で区切っていたものではなかろうか。この小さな畠を現在の大きな畠に統合した際に、それまでの境界になっていた施設の一部が地中に残されたもの、との推測が一番妥当なように思われる。

## 6. おわりに

風呂川遺跡の調査は、昭和55年1月の分布調査に始まり、昭和56年11月に現地での作業を終了した。本報告書執筆までに2年以上の時間がたったわけであるが、56年初夏の第1次調査、56年秋の第2次調査と、延べ95日間の調査を実施した。この間、事業主体の西有家町と協議を重ね、発掘調査中の事故もなく、この報告書を刊行できることになった。西有家町の担当職員の方々や教育委員会の方々の他にも、多くの人々の御支援と御協力をいただき、報告書刊行のはじびとなつたことに対し、最後になったが、心から御礼を申し上げたい。

さて、本報告書は、調査に至る経緯の項で詳述したように、風呂川地区土地区画整理事業に先行して実施した「記録保存」措置の、記録の報告である。遺構・遺物については本文中に詳述したので、ここでは全体のまとめを若干記し、また今後の問題を提起しておきたい。

遺跡の時代は、上器・石器とともに縄文時代晚期を主体としている。ここでは若干の先上器時代・弥生時代の遺物が出土しているが、全く主体とはなり得ない。ここでの出土品で目立つのは、扁平打製石斧であろう。近年、県内の縄文時代晚期の遺跡として調査され、打製石斧の出土している遺跡を挙げると、水の窪遺跡（福江市）、白浜貝塚（同）、ケイマンゴー遺跡（西海町）、黒丸遺跡（大村市）、朝日山遺跡（小浜町）がある。水の窪遺跡は、海岸に近い溶岩台地上に立地し、標高10mに満たない。白浜貝塚も五島灘に面した海岸砂丘上にあるが、ここでの石斧の出土数はさほど多くない。標高5mに満たない場所である。ケイマンゴー遺跡は標高40mほどの丘陵鞍部に近いゆるやかな斜面に位置し、黒丸遺跡は、郡川によって形成された扇状地の海岸に近い部分、標高5m前後の場所である。朝日山遺跡は、標高40～45mの、西側に向いた傾斜地にある。これらの遺跡から出土した石斧については、まず水の窪遺跡の場合は、海岸に近い遺跡でありながら、石錐の一点を除いては、漁労に関する遺物が皆無に近い事實をあげ、「漁労中心の生活から一部脱却し、この広大な溶岩台地の積極的な利用を始める時期の一点が縄文晚期にあたる」のではないか、とし、打製石斧のこの方向での使用について、断言ではないが、述べられている。黒丸遺跡の場合は、この使用痕の付き方から、「鍔は考えにくく、鍔が想定される」とし、明確に農耕具と規定している。朝日山遺跡は、「単純に、なんらかの栽培に直結して考えるのは疑問があるが」、「切削具以外の機能の可能性を考えておきたい」とし、「海岸部遺跡においてすら多量に出土する点を、晚期文化そのものの基本的性格にかかわるものと考えておきたい」としている。基本的にはこの考え方で間違いないであろう。

縄文時代晚期の遺跡は、島原半島には特に多く、原山支石墓群、山の寺遺跡、磯石原遺跡などが知られている。これらは比較的高い標高域にあり、低標高域にはあまり知られていないかったが、小浜町朝日山遺跡のほか、低地域での遺跡の存在が知られはじめている。さらには、定位した遺跡ではないが、有家町堂崎遺跡のように、海中干潟から多量の遺物を出土する遺跡がある。今後さらに低地域での遺跡の存在を確認する必要があろう。

さらに、縄文時代晚期に続く弥生初頭から前期にかけての遺跡の存在がほとんど知られていない。生産形態の変化による定住地の移動なども考えられるが、今後、存在の確認が急がれるところである。

さらには、地理的位置を考えると、有羽海を媒介とする文化の交流についても考えてゆかねばならないであろう。以上のことについては、本報告書では触れていないが、今後、注意してゆく必要があろうと思い、問題点のみ記してみた。

- 註1 「水の庭遺跡」福江市埋蔵文化財調査報告書 第1集 福江市教育委員会 1976
- 2 「山浜貝塚」福江市埋蔵文化財調査報告書 第2集 福江市教育委員会 1980
- 3 「ケイマンゴー遺跡」長崎県文化財調査報告書 第52集 西海石油共同備蓄株式会社・長崎県教育委員会 1980
- 4 「黒丸遺跡」大村市 黒丸遺跡調査会 1980
- 5 「朝日山遺跡」小浜町文化財調査報告書 第1集 小浜町教育委員会 1981

#### 参考文献

- 「小浜遺跡」賀川光夫 九州考古学14 1962  
「長崎県小浜町の先史文化概要」下川進 諸町制50周年記念誌 同削おぼま 1974  
「山の寺櫛木遺跡」古田正隆 百人委員会埋蔵文化財報告 第1集 1973  
「国指定史跡原山支石墓群 環境整備事業報告書」北有馬町教育委員会 1981  
「重要遺跡の発見から崩壊までの記録」古田正隆 百人委員会埋蔵文化財報告 第3集 1974  
「島原市の海中干潟遺跡」古田正隆 百人委員会埋蔵文化財報告 第2集 1974  
「疊石原遺跡」古田正隆 百人委員会埋蔵文化財報告 第7集 1977  
上記のほか、  
『盆崎遺跡』が今年度中に長崎県教育委員会から刊行の予定である。

図 版



第1地点（左端）・第2地点（テントから右側）



風呂川遺跡遠景

南東から



北から望む



第1次調査 調査風景

南から望む

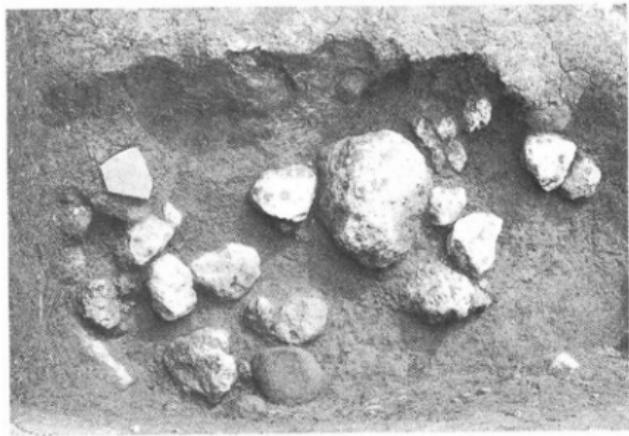


第1地点（中央部家の手前）



風呂川遺跡遠景（第1地点）

図版 4



第 1 次調査 A-3 グリッド



A-0 グリッド東壁



第1次調査 土層(1)

A-1 グリッド東壁

図版 6



F-13グリッド東壁



第1次調査 土層(2)

F-14グリッド東壁



第1地点 調査風景

図版 8



D-3 グリッド東壁



D-2 グリッド東壁



第1地点 土層(1)

D-1 グリッド東壁



A-I グリッド北壁



B-I グリッド北壁

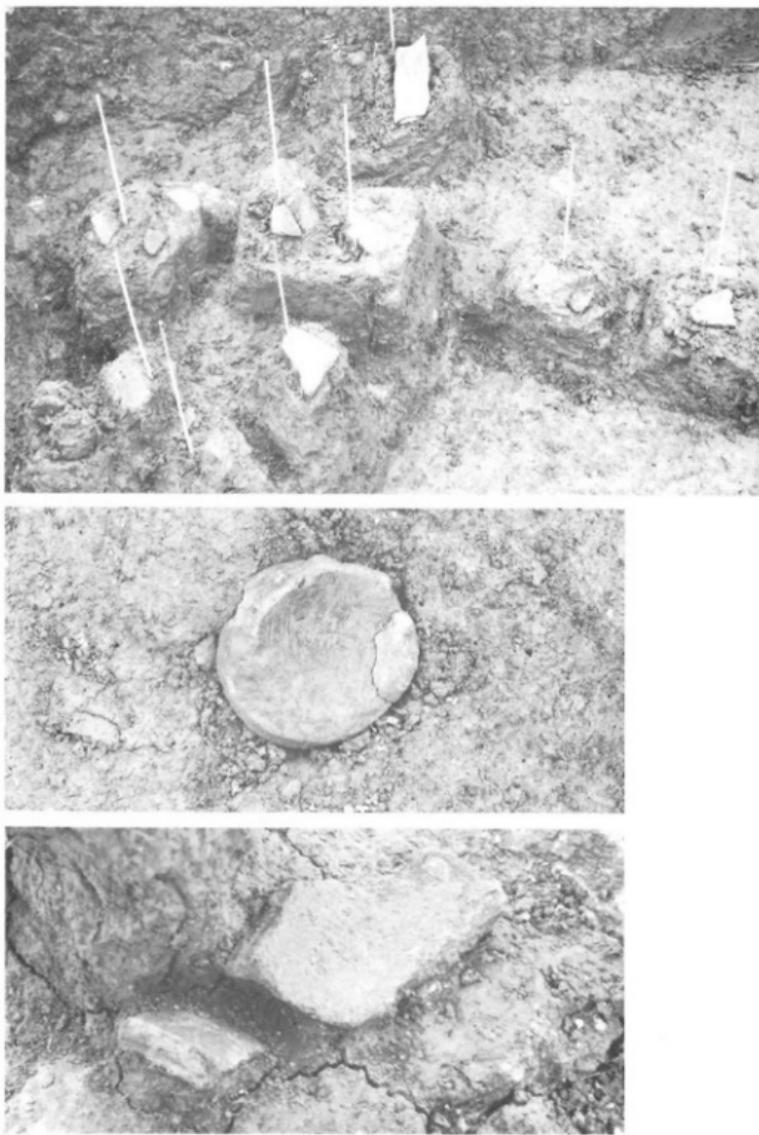


C-I グリッド北壁

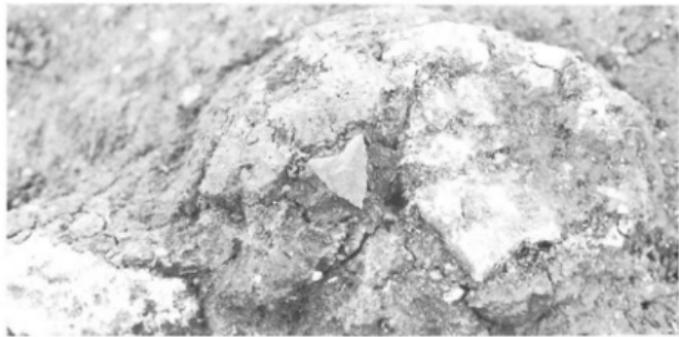


D-I グリッド北壁

第1地点 土層(2)



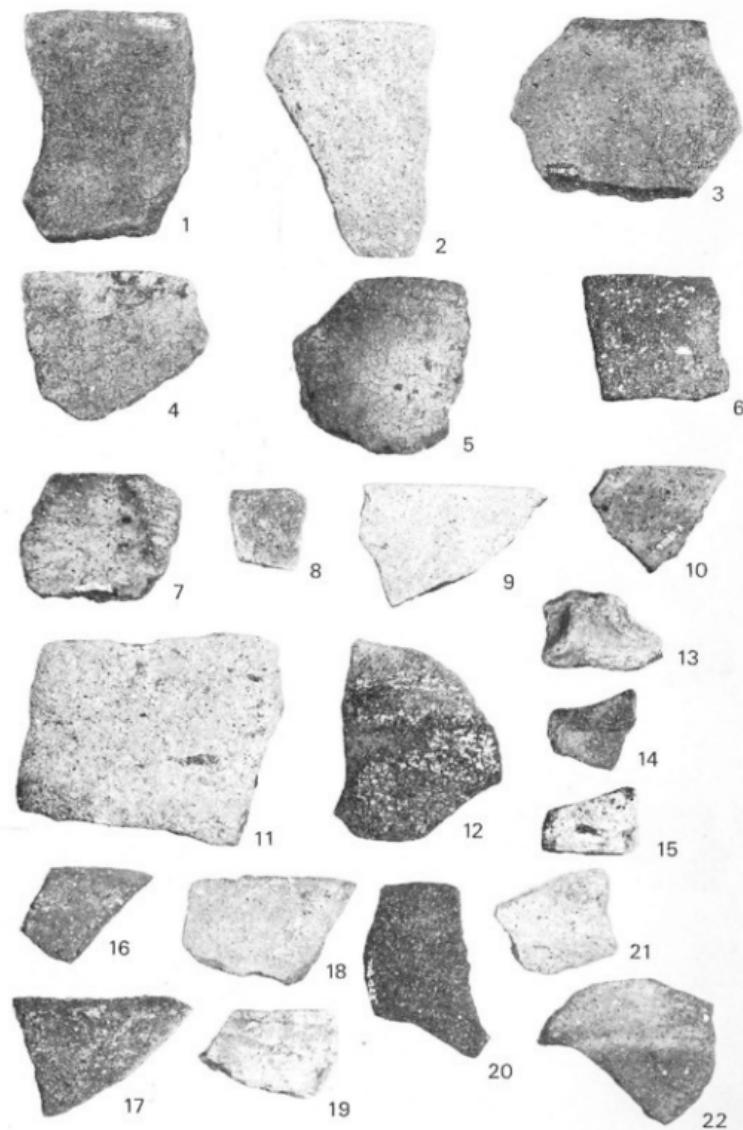
第1地点 遺物出土状況（1）土器



第1地点 遺物出土状況(2) 石鎌

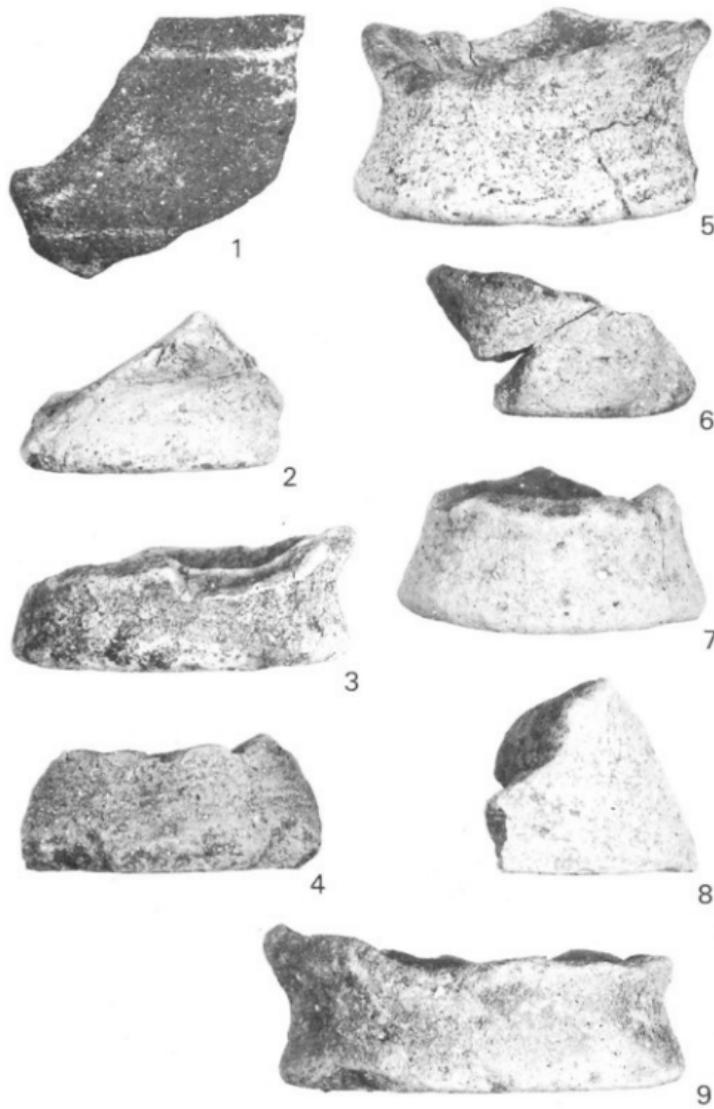


第1地点 遺物出土状況(3) 石器



第1地点出土土器(1)

番号は第11図の番号に一致する



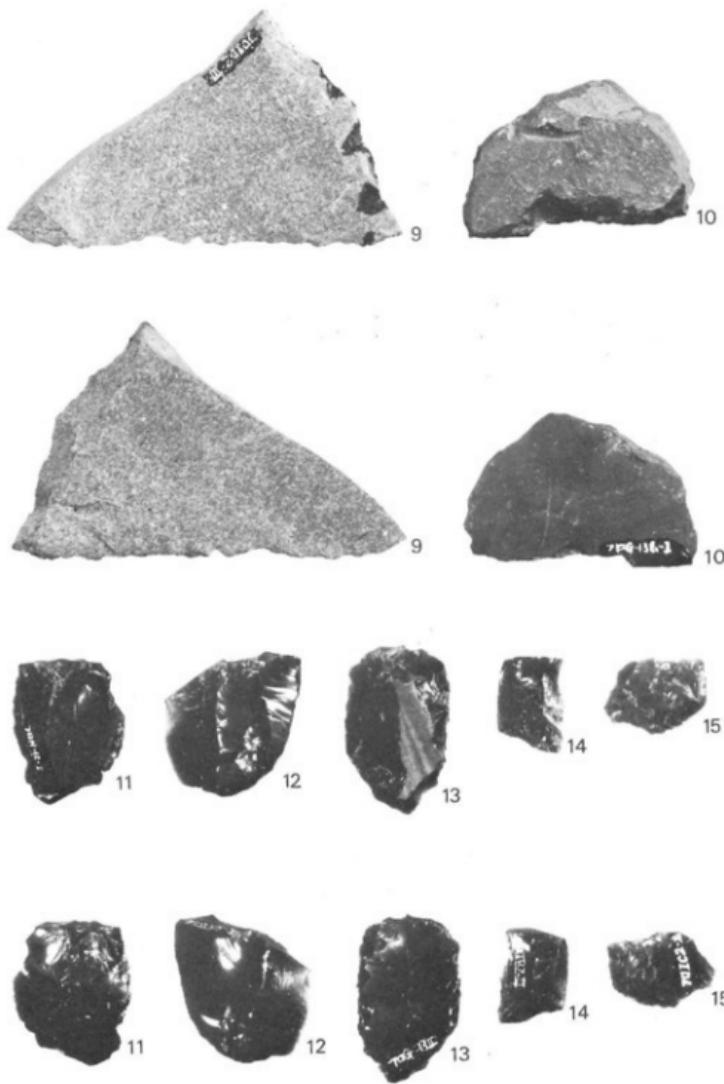
番号は第12図の番号に一致する

第1地点出土土器(2)

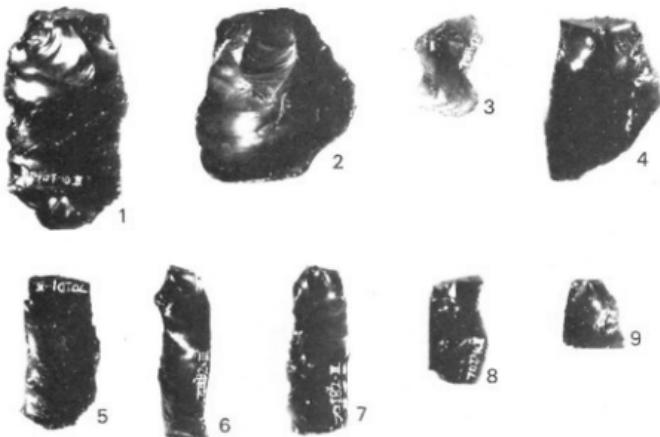
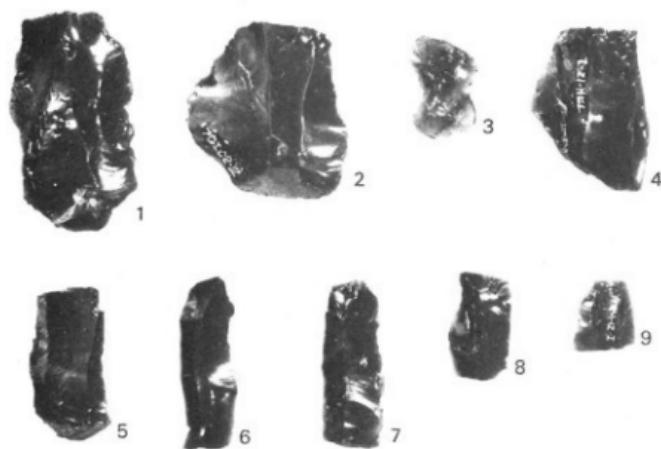


第1地点出土石器（！）

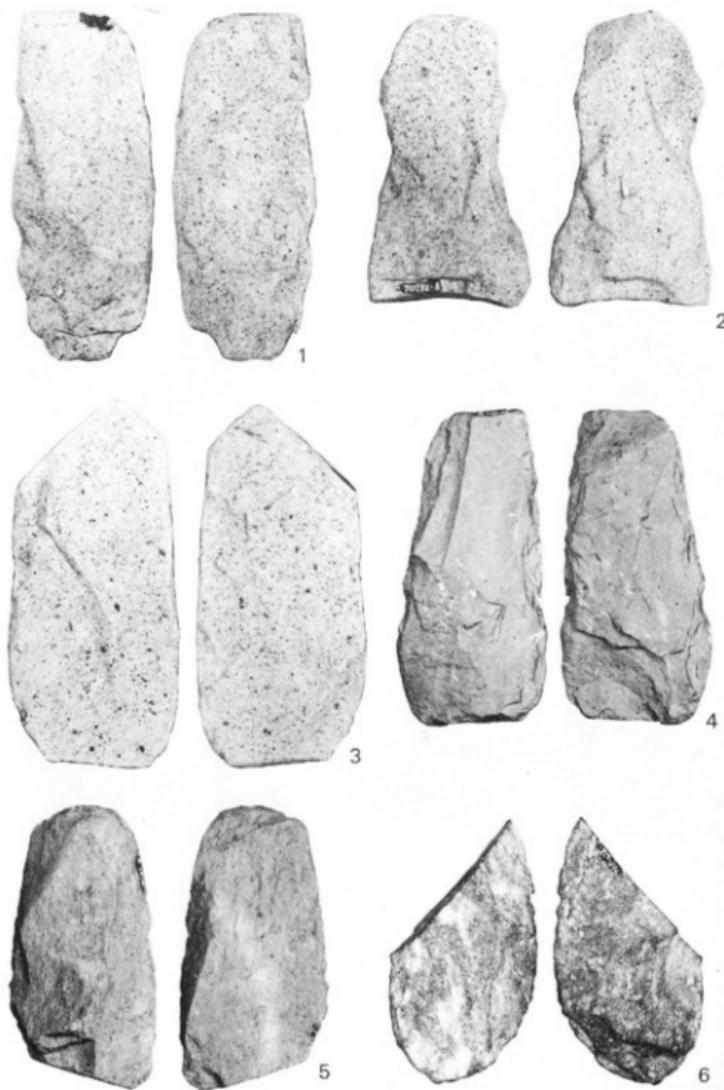
番号は第13図の番号に一致する



番号は第13図の番号に一致する  
第1地点出土石器(2)



番号は第14回の番号に一致する  
第1 地点出土石器(3)



第I地点出土石器(4)

番号は第15図の番号に一致する



テントから右側が第2地点



調査風景

風呂川遺跡遠景（第2地点）



北側から望む、正面の島は  
熊本県天草郡大矢野町湯島



集石遺構調査風景

第2地点調査風景

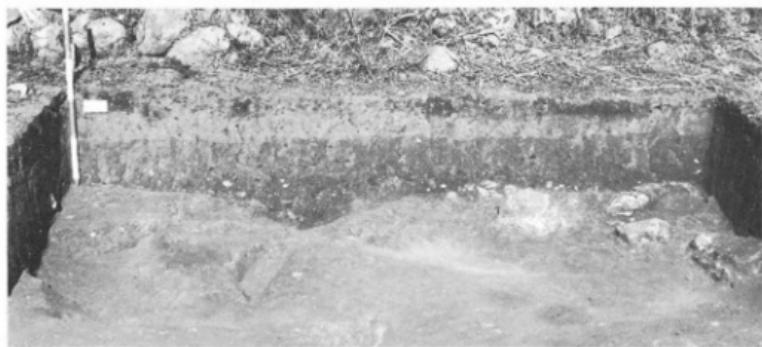


右後方の山は高岩山



第2地点調査風景

図版22



C-14グリッド東壁



C-12グリッド東壁



C-10グリッド東壁

第2地点 土層(1)



C-6 グリッド東壁



C-4 グリッド東壁



C-2 グリッド東壁

第2地点 土層(2)



B-9 グリッド北壁

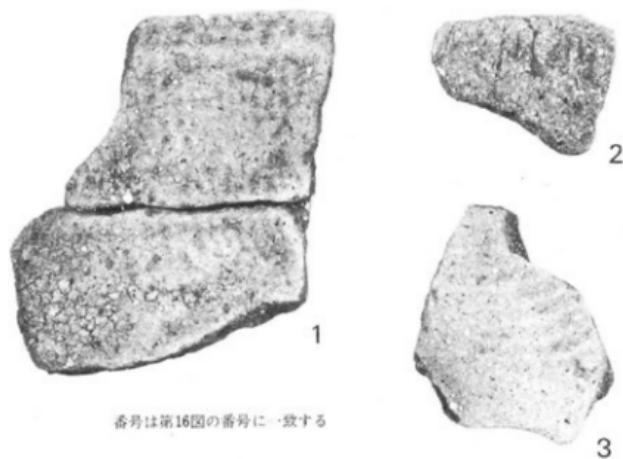


C-9 グリッド北壁

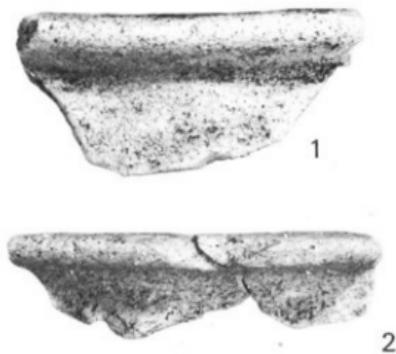


D-9 グリッド北壁

第2地点 土層(3)

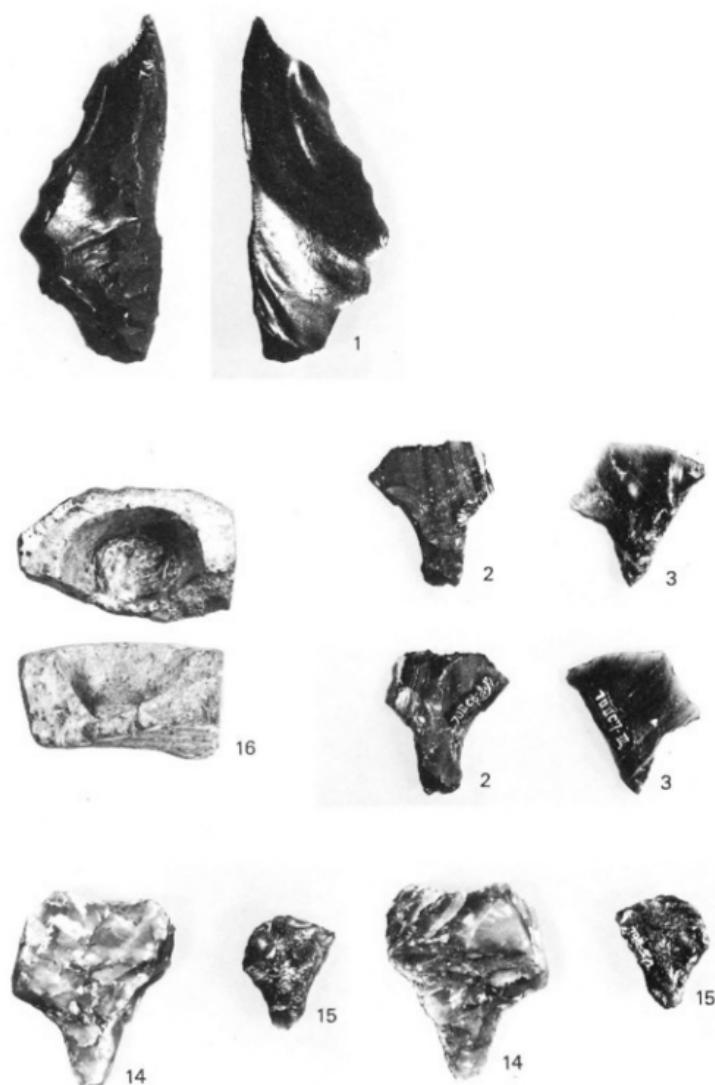


番号は第16図の番号に一致する



番号は第17図の番号に一致する

第2地点出土土器

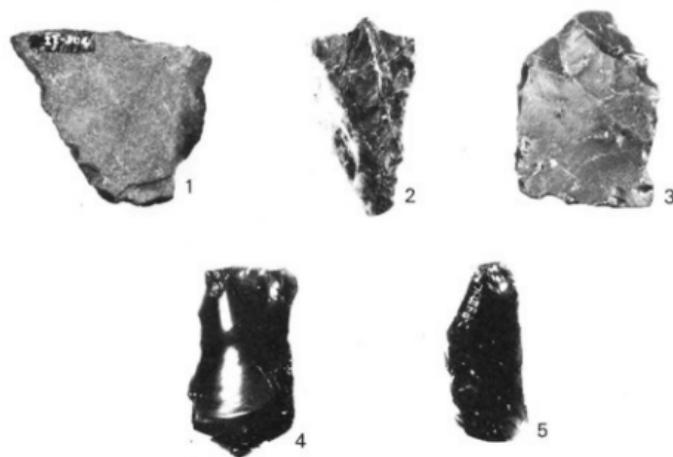
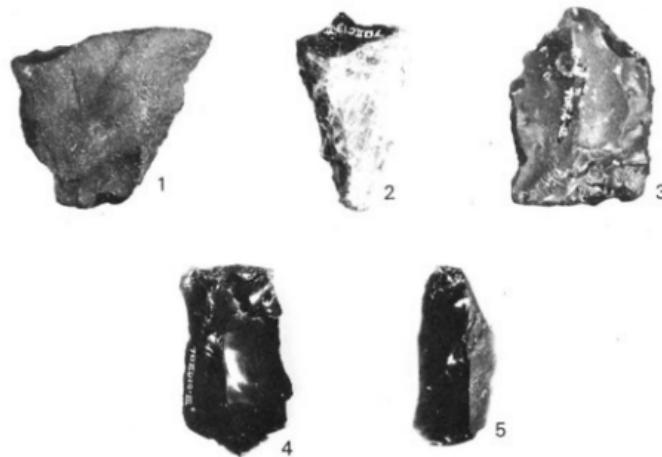


第2地点出土石器(1)

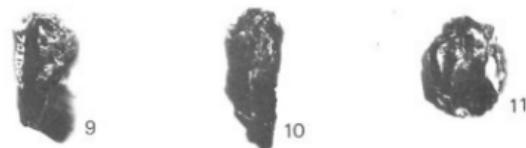
番号は第18図の番号に一致する



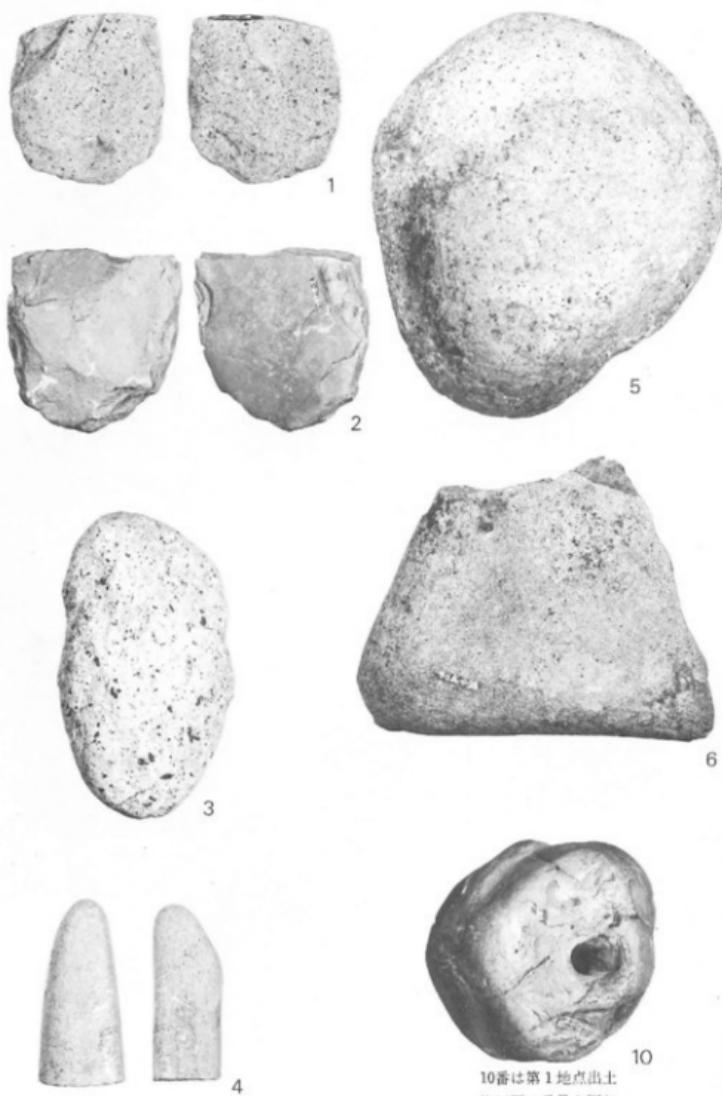
番号は第18図の番号に一致する  
第2地点出土石器(2)



番号は第19図の番号に一致する  
第2地点出土石器(3)



番号は第19図の番号に一致する  
第2地点出土石器(4)

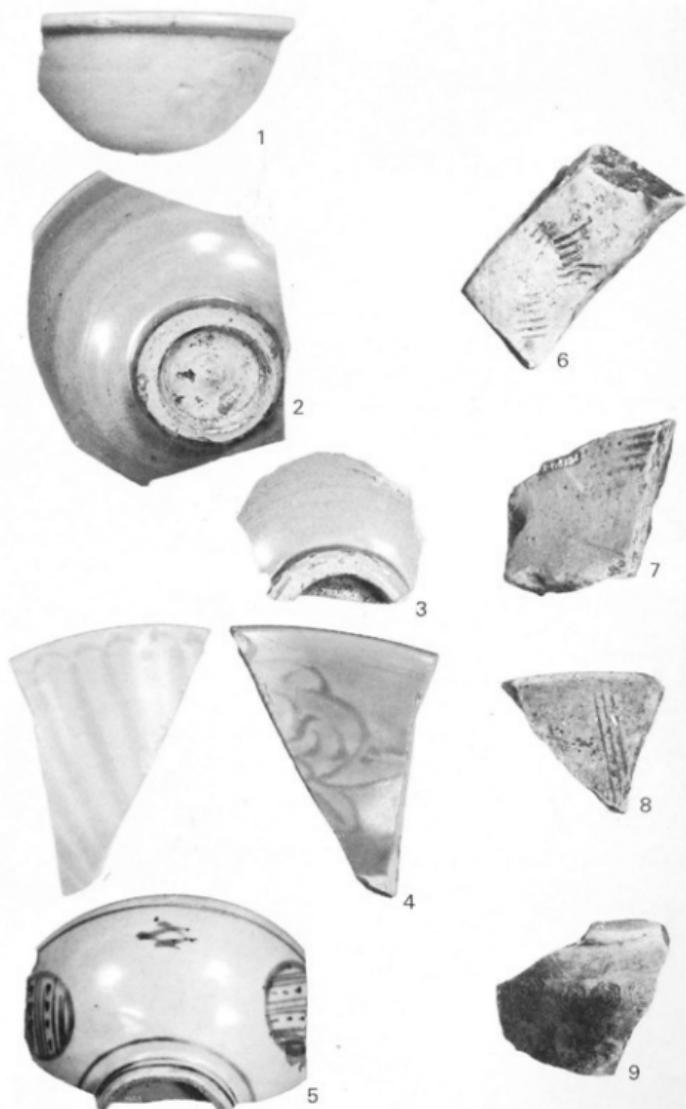


10番は第1地点出土

第14図の番号と同じ

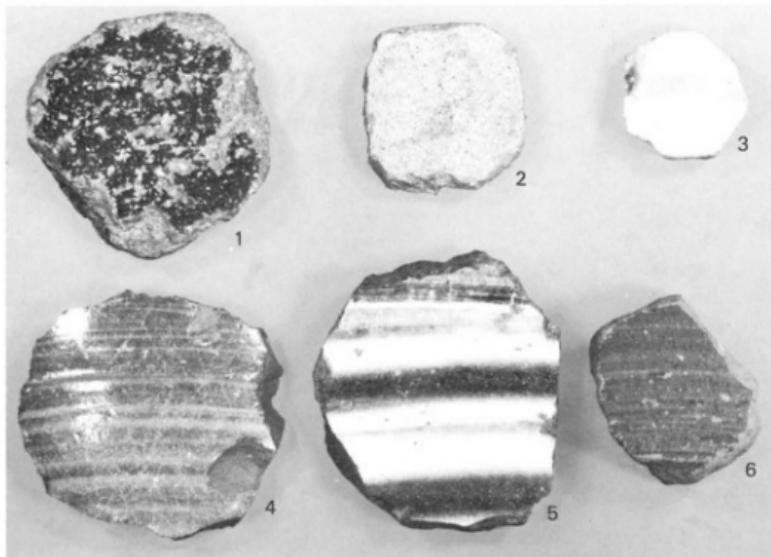
番号は第20図の番号と一致する

第2地点出土石器(5)

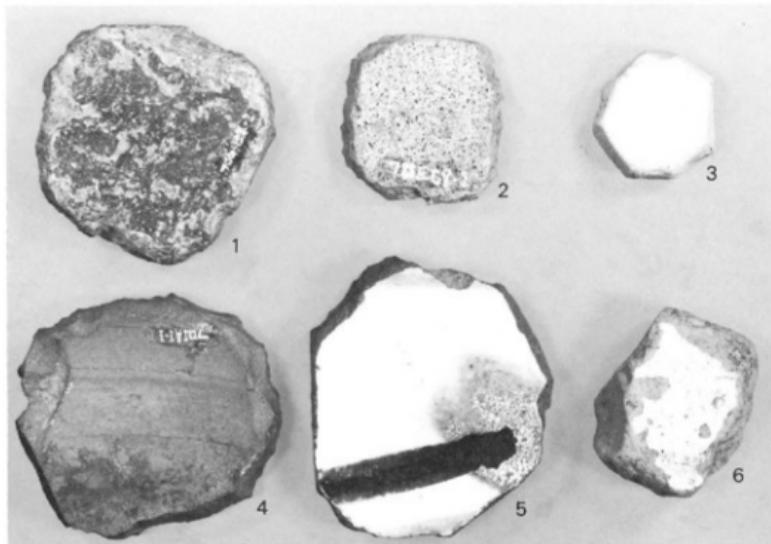


第2地点出土青磁・磁器・瓦器

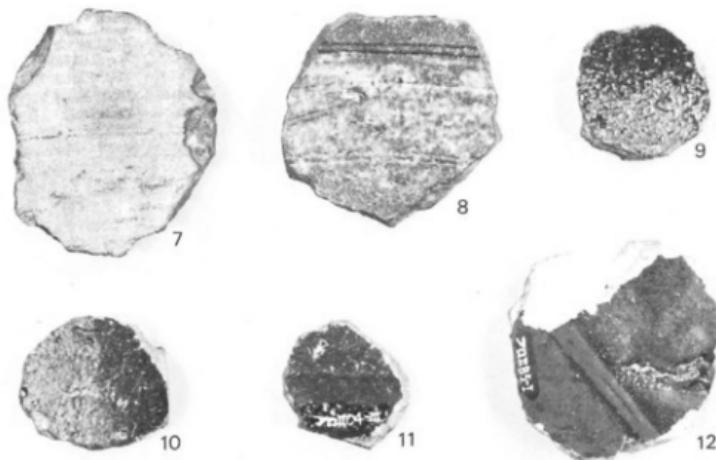
番号は第21図の番号に一致する



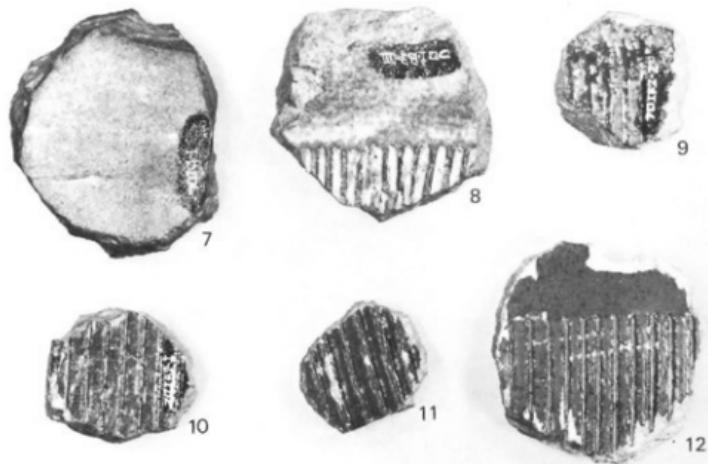
上表面 下表面



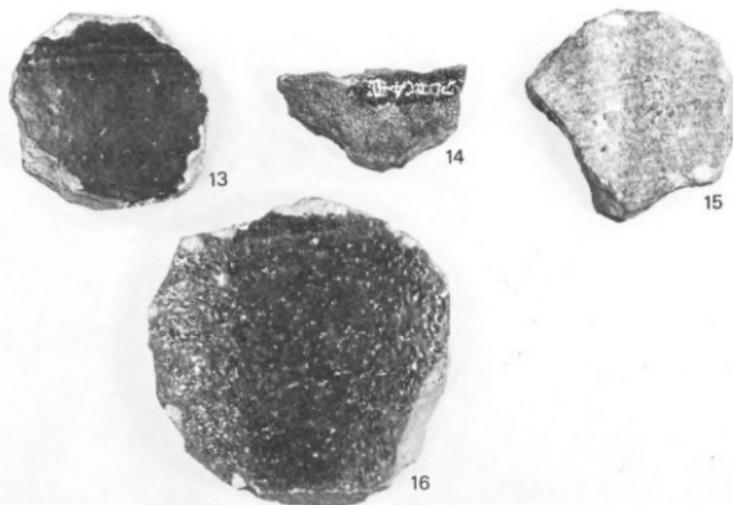
番号は第22図の番号に一致する  
円盤状陶磁製品(1)(実大)



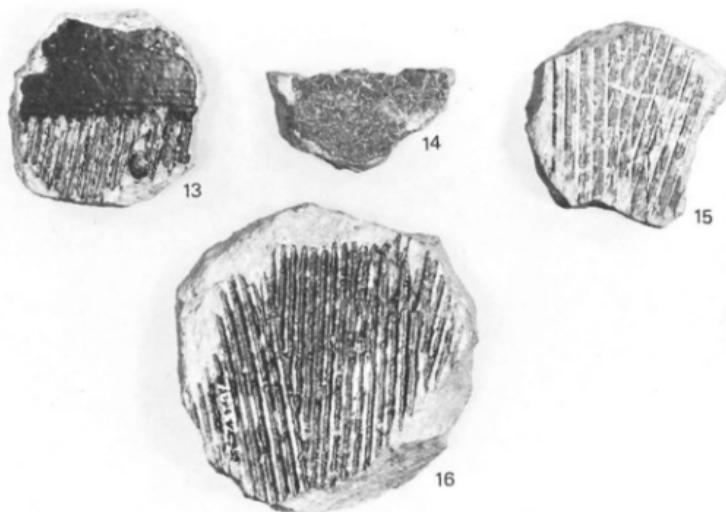
上表面 下裏面



番号は第22図の番号に一致する  
円盤状陶磁製品(2)(実大)



上表面 下裏面



円盤状陶磁製品(3)(実大)

番号は第22図の番号に一致する

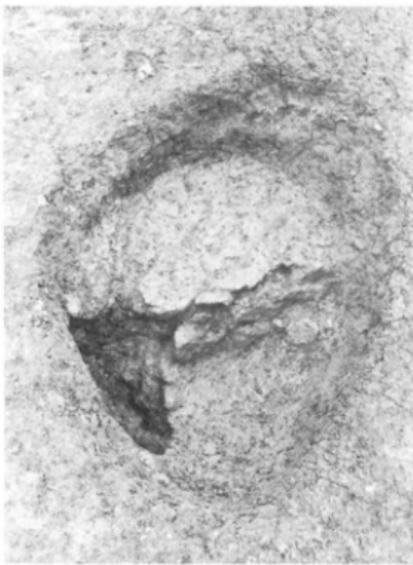


西から  
手前が1号集石  
奥が2号集石



南から

第2地点 集石遺構(1)



集石を除いたあの状況

第2地点 集石遺構(2) 1号集石



集石を除いたあとの状況

第2地点 集石遺構(3) 2号集石



土層の状況



第2地点 不明窓穴(1)

西から底を見る



南から底の状況を見る



石をとり除いた状況

第2地点 不明堅穴(2)



西から見る



南から見る

第2地点 配石遺構



西有家小学校の見学会



西有家中学校の見学会  
見学会風景



第1次調査に参加した人達



第2次調査に参加した人達

西有家町文化財調査報告書 第1集

風呂川遺跡

昭和57年3月31日

発行 長崎県西有家町教育委員会  
〒859-22 南高来郡西有家町須川485

印刷 株式会社 隆文社  
佐世保市瀬戸越町260